

山本勉弥著

萩俳諧史





Handwritten text on a rectangular slip of paper, featuring several vertical columns of characters in cursive script. The text is partially obscured by a dark vertical strip on the right side.

Handwritten text on a rectangular slip of paper, featuring several vertical columns of characters in cursive script. The text is partially obscured by a dark vertical strip on the right side.

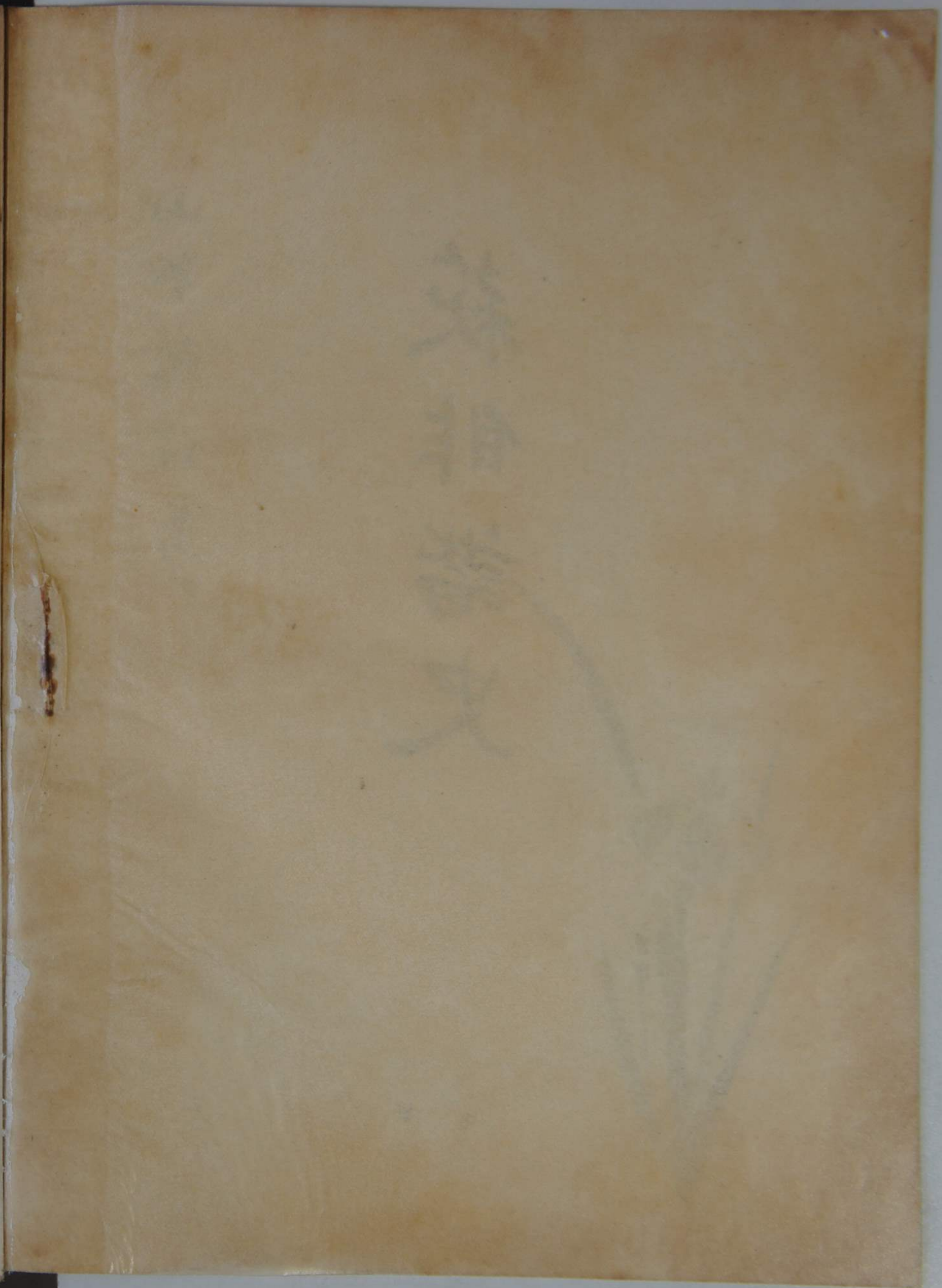
Vertical title text in large characters, likely reading "後無端式" (Go-mu-ban-shiki).





Handwritten Japanese text in vertical columns, likely a list or index. The text is written in black ink on a light-colored background. The columns contain various characters and phrases, including what appears to be a date or time reference on the left side.

Handwritten Japanese text in vertical columns, continuing the list or index from the top section. The text is written in black ink on a light-colored background. The columns contain various characters and phrases, including what appears to be a date or time reference on the left side.









蕪文化叢書第六卷

蕪俳諧史



## 序

ペンを握つたままなぜかしらボンヤリ、私は千葉県検見川の沼地で、古代の丸木舟と一諸に発見された二千五百年前の蓮の實が、美しい花をつけたといふ新聞の記事を思つてゐました。辨証法的説明がどうあるうとも、萩俳諧史は山本先生によつて拾ひ上げられた古い文化の實だご、私を感じているからなのでせう。

杜絶えてしまつた文化の繼承を究めることは大變なことです、萩地方の俳諧の歴史もその例外ではありません。幾年かコツコツと研究を続けられた先生の御努力の結晶であつて、ここには耀くばかりの生命がいきづいてゐることを感ずるのは一人私だけではない筈です。

一昨年文化の日の記念行事の一つとして、図書館で萩の俳諧史料展を催したことがあります。山本先生外數名の方の御盡力で展示を終り、好評を得たのですが、いま先生の求めて臆面もなく、この本の序文を書くのはかうした關りか

らです。

ごにかく、萩の俳諧が今日の俳句ご、その生成發展のつながりに於てごんな關係に立つか、又その占める位置なごを考へる時、萩俳諧史は、單なる過去の事實だけでなく、興味深い且つ稀有なるものであることを疑ひません。

こんな本をこそ本當に郷土史ご呼びたいと思つてゐます。

六月の光の降る朝先生の叢書がまた一冊ふえたことを心からよろこび、先生のにこやかな微笑を忍びながら、畏敬ご愛情ごを以て序文のペンを擱きます。

一九五三・六・三

山口県立萩図書館長 大村 武 一

## 自序

萩は毛利輝元開府以來、防長二州の政治的樞府であるご同時に、文化的にもその中心地であり、俳諧も他の文藝と共に風雅な趣味ごして流行したものである因つて萩文化史の一翼として、萩俳諧史を書いて見たいご云ふことは、余が多











に向ひ、相競つて宣傳誘導に努めた。而して熱心な俳人達は進んで美濃江戸に行き、親しく美濃派宗匠の教を受け、諸所に行脚して自己の向上に資して居る。斯くして他國の行脚が來萩しても、ゆつくり應待が出来るやうになつた。又安部家系統で、比較的輕輩である藩十達も自家を廻り持にして、俳諧連歌の會をやる様になつた。萩はどういふものか芭蕉の正風なるものを美濃派を通してのみ受け、他派の宗匠との關係が殆んどない。美濃派との密接な關係は別項で述べることにする。

天保年間には全国的に見て、各種文藝が盛んになり、狂歌雜俳なども非常に流行した。然し眞文學より見て墮落の傾向であること勿論である。萩は俳諧師名簿を見てもわかるやうに、此時代には俳人の數が目立つて増えて居るが、其惡影響も受け入れ、堂々たる宗匠で雜俳の撰者をして居る人もある。所が嘉永安政になり、外艦の來航なきより、國內は物情騒然たる形勢を來たし、殊に長藩は文久元治と、累卵の危き苦境に陥り、文藝を玩ぶどころではなくなつた。明治四年廢藩置縣となり、安部眞貞、東京に轉住し、萩での安部家系統はなくなつた。この衰退期を経、明治維新大變革の餘波も稍々靜かになつた明治廿年頃には、滯留客應待に事欠かぬ富豪連に、好き者が多かつたので、行脚も比較的多く來萩し土地の俳人もそれ等の人に刺激せられ、連歌の勉強をしたやうである。

安部家は毛利藩として公認の俳諧師系統である。次に擧ぐべきは原箇枕によつて創始せられた聽松庵で、昭和廿四年八月原田只月が歿するまで、十四代を重ね、最も永く續き且つ重んぜられた結社である。次は加邊里川によつて創められた古萩園で、伊佐一路に至るまで十一代を重ねた。尙一つは竹奥舎其音によつて建てられた菖蒲庵で、余の推定して居るころでは、伊藤龍華に至るまで九代を経て居るこれ等歴世の傳統は次項に誌す通りである。安部家聽松庵及古萩園に就ては、從來から知悉せられて居り、問題はな

いが、菖蒲庵に就ては今回余が不十分ながら、其系統を調べ擧げたので、少しく解説を加ふる必要がある。竹奥舎其音が創めた社が菖蒲庵であることは、有吉宜哉古萩園文臺開の辞の中に「三友亭傳來の竹奥舎菖蒲庵の文臺云々」にあるに因り推定が出来る。二代が娛中坊桃戎であることは、祖式尹哉が書いた秋の筐（娛中坊追悼句集）の序文の中に「遠くははせを翁の風骨を追ひ、近くは白壽老師の洒落をしたひ、この師の膝下に一かたならぬ教示に預り、歸杖の後は竹奥先師の閑窓に、夜となく晝となく、奈良茶三石の功を積み、道の流を繼ぎて云々」とあるに因つて明らかである。三代を尹哉にしても間違ひはないと思ふ。

娛中坊の追悼句集を刊行して居るのは、師が歿後に存在する第一の高弟である證據であるからである。四代三友亭古溪から五代山根素全に文臺が移行したのは、宜哉が古萩園

俳句界の偉傑正岡子規が革新を叫び、日本派俳句（所謂新派俳句）を樹立し、明治三十一年東京から雜誌ホト、ギスを發刊して以來、教育ある青年は靡然として其傘下に走せ爲めに連歌を玩ぶ月並俳諧は、僅かに老人によつて支持せられて居たが、漸次衰退の一途を辿り、在來の行脚など、云ふ時代錯誤、膝栗毛式の修鍊は全く行はれなくなつた。萩に於ても此大思潮の下に狀勢が一変し、適當な後繼者を得ることが難くなり、菖蒲庵は伊藤龍華を最後、古萩園は伊佐一路を最後、聽松庵は原田只月を最後として、全く俳諧結社の跡を絶ち、偶然にも萩俳諧史を纏めるのに都合の好い時機になつたのである。

舊派俳諧は文學的價值少く、現時に於ては環境から見ても推稱すべきものではないであらうが、然し元來俳聖芭蕉を祖述するのが主であり、地方の宗匠と雖も、点取り主義や安價な玩弄的態度の者許りではなく、其作句の鑑賞に價するものも存する。吾人は舊派俳諧を引ふと共に、師弟情義の濃厚、刻苦勉學の態度其他慈味の掬すべきものを採るに吝さかであつてはならない。

### 萩俳諧史の系統

文藝の嗜みが多い祖先の血を受けた安部春貞が、毛利綱廣より延寶八年に抱へられて以來、安部家は藩が廢せられるに至るまで、俳諧連歌の師範家として七代持續した。即ち文臺開の辞によつて明かである。素全は安田伊哉坊追善句集「道の月」を筆寫した後に「菖蒲月菖蒲の主しるす」とあるのも、一つの傍證である。唯だ尹哉から古溪に文臺が傳つて居ることに就ての確證がないのであるが、年時の關係から、即ち尹哉が歿した嘉永七年より、素全が歿した万延十年までは、僅かに六年しかないもので、この間に古溪以外の繼承者があらうとは考へられぬから、古溪が四代であるとして、間違ひがないと思ふ。

素全から作間玉川に文臺が傳つて居ることに就ても確證がない。從來は玉川以下は全く別派の社であると解されて居たのである。余も一時はそれを肯定して居たのであるが、玉川の後を受けた唐樋町居住の板垣視曉の許へ、幼時よく使ひに行つた田總百山は、明かに板垣の社は菖蒲庵云つて居たと、余に語られたこと。其傳承の文臺が白壽坊より出たものであることの二点を考へ合はすと、玉川の俳諧の師は江戸の等流園であるが、玉川のうけ繼いだ文臺は菖蒲庵のものであると、推定するに至つたのである。然しこの点は尙少しく考慮の餘地が存する。以下八代九代に至るまでは説明の要がない。

### 連歌師安部歴代の略歴と作句

春貞は藩主毛利綱廣より拔擢、士籍に列せられ、連歌師としての祿を始めて給せられたので、萩に於ける公的俳諧宗



匠の祖であり、安部家第一世と稱すべきである。その子孫は食祿、家學を受け継いだが、民間宗匠の如く自ら第何世とは稱へなかつたが、然し余はわかり易く假に何世と呼ぶことにした。先づ春貞に至るまでの安部家のことを略述する。平知盛より十一代に安部知家があり、吉見家に仕へ、軍功によりて石州本領に阿武郡の一部をも加へられた。その子家貞は萩に移り住んで、自分の法名を名とする常念寺を建立した。その子元貞、元貞の子吉貞は今古萩に住居した。元貞の弟に經貞がある。吉貞は初め吉直と稱し、薙髮して休嘉と號した。才藝あり、和歌を好み、吉見廣頼に従ひ、文祿の役に軍功があつた。寛永十四年九月廿九日歿、享年六十九。その子直貞は始兼貞と稱し、涼齋と號した。吉見廣行に仕へたが、吉見家没落と共に買人となり萩に住した。承應元年十一月十五日歿、享年五十三、その子に宗貞と春貞がある。直貞の句に次のものがある。

誘はれて來しや末野の虫の聲 直貞

神慮松に顯はす時雨かな 常貞

常貞のこの詳かでないが、安部家の句集に見えるので、經貞のこのこではないかと思ひ附記した。

連歌師安部家一世 春貞 吉左衛門尉と稱し、梅庵と號す才藝多趣、幼より和歌を好み、延寶七年江戸に遊び、吉川惟足の門に入る。惟足は肖柏傳來の古今和歌秘傳の箱を保つ。春貞は藩主の力添えを得、その傳授を懇請し、遂に翌

全 六世 惟貞 清左衛門、新之丞、又は諒と稱し、初め福臣、櫻戸と號す。本居大平の門人。文久三年五月四日歿、享年不詳。

俳句も多くある筈なるも、散佚して傳はらず。慶應二年に金谷天満宮に千句連歌を奉納したりと云ふも、既に存在しなく。

全 七世 眞貞 卯吉と稱し、號は初め盈貞、和臣、正臣平田篤胤の門人。古語の學と連歌の故實に至つては比肩する者なしと稱せらる。宮内省御歌所御用掛となる。明治廿六年七月三十一日歿、享年不詳。

惟貞の次男に健臣あり、兵介と稱す。明倫館國學助教、遊撃隊の教師なきを勤む、未刊行なるも遺著二十餘種がある。明治二年歿、享年四十。

葉櫻の紅葉時めく小春かな 健臣

### 聽松庵歴代宗匠の略歴と作句

一、聽松庵初世 原簡枕

簡枕は鶴軒とも號す。元來雲谷派の画家で、等仲と稱し、馬を描くに巧みである。眼疾の爲め早く隱退し、風流の道に志し、禪學に心を寄せた。俳諧は美濃派四世田中五竹坊に師事し、美濃派を萩へた最初の人である。安永十年二月二十三日歿、享年六十二。墓石は見當らぬが、位牌は清正院（通稱嶽觀音）にある。位牌の臺に花松と並刻され

年六月十一日より十二月三日の間にそれを受け終つた。元祿十一年二月五日歿、享年七十七。

秋津洲の神や交る神樂歌 春貞

梅が香に道は迷はぬ冬野かな 全

全 二世 信貞 佐兵衛佐と稱す。享保七年正月三日歿、享年六十六。

全 三世 和貞 吉左衛門尉と稱す。寶曆十二年五月廿一日歿、享年六十八。

行雁の文字は跡なき霞かな 和貞

祝ひ初世や幾昔神の梅 全

積れ尙色は豊年宿の雪 全

全 四世 武貞 新左衛門と稱し、後に勝貞と號す。寛政六年正月十九日歿、安部家俳諧史上この時代が最も盛んであつたと思はれる。和歌もその子行貞と共に多く詠んで居る。

曳留よ隙行駒を糸櫻 武貞

水に燃えて暑さは消る螢かな 全

高き山も麓こなりぬ雲の峯 全

全 五世 行貞 吉兵衛と稱す。文政十三年十一月十五日歿、享年不詳。

咲く花や宿の榮へも増り草 行貞

夏も秋も行逢ふ瀬々や御萩川 全

枯ぬ色は惠の種ぞ神の松 全

である、恐らく門弟二人の略號であらう。

芽柳や急いで散つたほどに又 簡枕

饞別 畑打つて心楽しい種待たん 全

めでたからん其水上も菊の時 全

二、全 二世 致一房

致一房は單に致一とも號した。姓は不詳、簡枕と同じく雲谷派の画を描き、禪學にも志した。天明八年十一月十四日歿、享年不詳、墓石は見當らぬが、位牌は清正院にある。

曲突を掃かれて立つや秋の蠅 致一房

來ては又其奥見たし山櫻 全

手々にけふ摘もほかなし手向草 全

三、全 三世 亞聲坊

亞聲坊の姓名、歿年、享年共に不明である。

大庭學僊画く所の肖像には羽織を書て居るので、商家の人と察せられる丈けである。享和三年刊行の熊谷豊路追善句

集「雪のねぐら」に序文を書いて居る。

追善 言の葉も思ひの種に蒔かれしか 亞聲坊

宿曳の松にすがるや秋の暮 全

ア伽にくむ温み分けしや硯水 全

四、全 四世 夢游房

夢游房はまた烏強とも號す。姓名、歿年、享年共に不明である。金谷天満宮境内にある放生會碑文の作者で、それは文政三年十月十三日である。美濃派再和房系九世の徐風



庵の書簡などによれば烏壁は文政十二年春六十一歳の時上京して居る。

葉柳や江に添ふ家に鶏の聲 夢游房

友慕ふ信ミゞけかし寒念佛 全

病み鴉一羽匍匐焼野かな 全

五、全 五世 大野雲鯨

雲鯨は萩玉江の人、名は泰二、諱は直度、又篁庵と號す。

美濃に再度徐風庵を訪ひ、更に奥の細道の跡を尋ねて行脚をした。嘉永六年五月八日歿、享年不詳。

あざやかな四月うつりや牡若 雲鯨

風ひや／＼北斗を拜む鼻の先 全

さみしさや撫る御堂の丸ばしら 全

六、全 六世 熊谷蘿月

蘿月は諱を芳淑、通稱を五八と云ふ。萩魚棚の富豪で、夙に學藝を好み、文雅の嗜み深く、各地を遊歴し、頼山陽、高野長英、田能村竹田等と交を結んだ。文久二年八月二十一日歿、享年不詳。

了了や世にうきでたる水の苔 蘿月

延びちからつゝむ木草や冬の山 全

このさきも長かれ松の若みどり 全

七、全 七世 永安壺公

壺公は諱を和莊と云ひ、始めは瓢々庵と稱し、次で四睡庵と稱し、又滴仙或は單に樂とも號す。

萩椿町の永安家に生る。俳諧の他和歌書畫を能くし、茶事を嗜む。萩を出て一時東京に住む。後京都に移り、推されて芭蕉堂六世を繼いだ。明治十年五月二十三日歿、享年六十八。

神樂笛杉間の箒やゞけはし 壺公

山柿の葉も染めあへず秋のゆく 全

見そなはせ菊も木槿も手向草 全

八、全 八世 片山幽草

幽草は名を久右衛門と云ひ、玄々庵と稱す。萩奥玉江農家の出にて俳諧を雲鯨に學ぶ。又美濃に至り、美濃派再和房系十四世の耕月庵に師事した。奥の細道の跡をたどりて行脚せるを首のこし、再々行脚に出て、多くの旅日記を残して居る。明治十五年四月廿六日歿、享年不詳。

大空も柳の色の夜明かな 幽草

焼けのころ草を褥や孕鹿 全

土筆摘み皆屋根船にはいりけり 全

九、全 九世 英得齋

得齋は名を壽人と云ひ、阿武郡小川村出身の醫師であるが永く萩に住んだ。幽草の跡を承けて九世となつたが、都合により歸村したので、一應其任を辞した。然るに巴城俳友の切なる勸説があるにより、明治十八年九月再び文臺繼承の決意をした。明治廿三年十一月六日歿、享年七十。

こゝろよき寐覽の床や友千鳥 得齋

藏ふたつ並べし軒や冬牡丹 全

清鷹 雷雨して命めでたしぬくめ鳥 全

一〇、全 十世 有吉宜哉

宜哉名は幸造、家號を双林舎と云ふ。維新前御直目附手子三田尻宰判筆者、山口町方兩人役等藩の諸役を勤め、明治十三年選ばれて川島、土原戸長となつた。俳諧は壺公に學び、明治廿四年春聽松庵の文臺を繼承した。明治廿七年十二月五日歿、享年六十三。

風の蝶ふかれながらに狂ひけり 宜哉

見に来たる人も踊の拍子かな 全

水鶏なくやゆかりありげな一構 全

一一、全 十一世 岡村龍華

龍華名は智秀、後年姓を伊藤と改む、扶桑園と稱す。御許町永林寺の住職である。大正四年十二月三日歿、享年六十三。

三十三才淋しがらせて飛にけり 龍華

月かげの端に水鶏の明けにけり 全

入花に似て花人に似ざりけり 全

一二、全 十二世 澤村台雨

台雨名は卯之助と云ひ、百花園と稱す。俳諧を雲鯨に學ぶ後各地を遊歴し、久しく浪華に住せるも、齡古稀の時萩に歸り、瓦町にて旅館を營む。龍華歿せる翌年、俳友の勧めにより聽松庵文臺を繼承した。大正七年二月四日樽屋町嫡

男久兵衛宅にて歿、享年八十。

雪舟の庭は崩れて石路の花 台雨

ひゞ粒の雨も手向か翁の日 全

泡の立つ流れこなりぬ初蛙 全

一三、全 十三世 瀧口如水

如水名は吉良、始め耕月庵、後に洗耳洞と稱す。大正六年九月聽松庵文臺を繼承した。貴衆兩院議員に選ばれるなど地方の名望家である。昭和十年八月十八日歿、享年七十八。

書に倦みて劍を見る夜や蟋蟀 如水

龍の天にのぼる氣運や國の春 全

座禪石我物にして蝸牛 全

一四、全 十四世 原田只月

只月名は益雄、自他樂庵と稱す。元來明木村の人なるも、晩年萩十日市に住す。明治廿九年台北在官中より俳句に志し、花本聽秋に師事、大正五年三月花本立机を允許せらる京都妙心寺に參禪するなど修養に努め、又近畿九州などへ行脚をした。昭和十一年聽松庵を繼承。昭和廿四年八月五日歿、享年八十一。

茶にさめて寐られぬ窓や梅に月 只月

はつ午や村に過ぎたる大太鼓 全

賣残る籠に覗のやゝ寒し 全

古萩園歴代宗匠の略歴と作句



一、古萩園初世加邊里川

里川は古萩園と稱す。安永の初め美濃に至り、田中五竹坊の下に螢雪の功を積み、安永二年老師自筆の文臺を譲與せらる。弘法寺境内にある萩墳(所謂おぼろ塚)は里川の建てたものである。文化十二年一月廿二日歿、享年七十九。稍や不確實であるも雨聽手懷紙により清光寺の住職に推定する。

- 追悼 草の露とけて誠のわかれ霜 里川 全
- 住捨て、庵主床しや苔の花 全
- 明石夜泊 短夜や明けて出て行くからす崎 全
- 二、全 二世 葦分

葦分の姓名は不詳、胡枝庵と稱し、又葦分師坊、或は釋葦分と署したのを見る。某書に北越吉崎にある蓮如上人の遺跡を尋ね度しとの言葉もあれば、眞宗の僧侶と思はれる。美濃派以哉坊系六世大野是什坊の膝下に學ぶ。文化八年に古萩園を繼承し、文政十二年十一月八日歿、享年不詳。

- 庵の主もその日暮しぞ花木權 葦分
- 行春や日も暮れ惜しむくれ惜しみ 全
- 立つもまた立たぬも淋し暮の鳴 全
- 三、全 三世 三坂雨聽

雨聽名は理平、號は始め如シツ園、方五齋、式部堂、後に常々園と改めた。藩士で葦分と共に里川の兩翼であつた、葦分の歿後古萩園文臺を繼承し、天保十二年五月素全にそれを繼承した。

七、全 六世 増山清和

清和名は九右衛門、八霞井と稱し、初め可清と號す。明治廿八年五月廿六日古萩園を繼承した。明治廿八年十二月六日歿、享年七十五。

- 翁忌や心ばかりの残り菊 清和
- 道すがら咄しこぎる、時雨かな 全
- 雨晴れて鳥の出て來る茂りかな 全
- 八、全 七世 中村如水

如水名は時亮、耕月庵と稱し、河島小橋筋に住した。清和の歿を承けて古萩園を繼いだ。明治廿九年九月十四日歿、享年四十六。

- 僧ひこり道一筋の枯野かな 如水
- 人影に魚寄る池や燕子花 全
- 梅買うは出來心なり年の市 全
- 九、全 八世 岡村龍華

龍華は聽松庵十一世である、如水の歿をうけて古萩園をも繼承した。

一〇、全 九世 澤村台雨

台雨は聽松庵十二世である、龍華の歿をうけて古萩園をも繼承した。

- 一一、全 十世 瀧口如水

如水は聽松庵十三世である、台雨の歿をうけて古萩園をも繼承した。

を讓つた。天保十四年四月八日歿、享年六十六。

- 鷹狩や兜頭巾の逞しさ 雨聽 全
- 皆背にさして踊の團扇哉 全
- 冬牡丹背に負ふ神の伊達小荷駄 全
- 四、全 四世 山根素全
- 素全名は半七、諱は忠成、始の雪汀園、後に六花園と稱した。藩士である。萬延元年九月廿七日兵庫の陣營に歿す、享年不詳。
- 親鳥も高うは飛ばす巢立鳥 素全
- 梅咲くや裏門覗く客もあり 全
- 料理人の姿逞し冷し麥 全
- 五、全 準五世 山根春和

春和名は秀亮、曉花園と稱す。素全の嫡男で法務官を歴任し、大審院判事となり、從四位に叙せられた。父は文臺を繼承さす意志があつたが、官務のため社務を見るこゝが出来ず。父の歿後暫時文臺を手許に置くに止まつた。歿時享年共に不詳なるも、明治廿四年三月十二日追福俳諧の連歌が増山八霞井園で催され、それを東京の靈前に供へて居るに因り、明治廿四年の初めに歿したと思はれる。

- あじなき世を悟りてや寒念佛 春和
- 慕はしや梅に曳かるゝ杖のあき 全
- 六、全 五世 有吉宜哉

宜哉は聽松庵十世である。明治廿四年七月頃古萩園の文臺を繼承した。

一一、全 十一世 伊佐一路

一路名は辰四郎、一路庵と稱し、永らくの間布仙と號した。昭和七年三月廿七日古萩園を繼承。昭和十一年一月十五日歿、享年八十三。

- 月花の影に瀬をこす小鮎かな 一路
- 橋までも續けて月の踊かな 布仙
- 翁忌や無事に揃し去年の顔 全

菅蒲庵歴代宗匠の略歴と作句

一、菅蒲庵初世 其音

其音の姓名は不詳。竹奥舎又は菅蒲庵と稱す。萩藩士である。五十三歳の時と其後三二回、美濃江戸に行き、大野是什坊、野村白壽坊に教へを受けて居る。歿時、享年とも不詳であるが、文化十一年には八十四歳であるから、餘程長命であつたことが知られる。簡枕よりは十一歳の年弱里川よりは六歳の年長である。

- 行秋や残してならぬ神詣 其音
- 追悼 思ひそへて跡したふ日や霜の道 全
- 川中の雪を見せたる筏かな 全
- 二、全 二世 穴戸桃戎

桃戎は娛中坊と稱し、萩藩士である。東都祇役の際、江戸居住の野村白壽坊に親しく教を受け、歸萩しては其音の許



に日通じ、研學に努めた。天保十二年九月歿、享年八十。

おしむ春や掃き寄せておく花ほこり 桃戎

白壁の夢かと思れば蚊帳かな 全

宵もたのしむ朝顔算へては 全

三、全 二世 祖式尹哉

尹哉名は半輔、觀耕亭と稱す。萩藩士で江河水車筋に住んで居た。嘉永七年一月十八日歿、享年不詳。

一本に一山しらむ櫻かな 尹哉

さし上げて戻る土産や藤の花 全

星は北へ流れて寒し時鳥 全

四、全 四世 古溪

古溪の姓名は不詳、三友亭と稱し、萩平安古に住んで居た。歿年、享年共に不詳。

梅の花ほめく出たり門ちがひ 古溪

夏をよそに漕ぎ捨て行くや月の舟 全

たはむ竹に雪の一つ家見出しけり 全

五、全 五世 山根素全

素全は古萩園四世であるが、古溪の後をうけて菖蒲庵をも繼承した。

六、全 六世 作間玉川

玉川の名は藤右衛門、石鏡亭と稱す。藩士である。江戸の等流園倭吹に師事した。歿年享年共に不詳。

七、全 七世 板垣視曉

視曉の名は詰曼、四季園と稱す。藩士である。等流園に師事し、視曉の號は師の名づけたもの。明治十六年一月三十日歿、享年七十五。

菜の花や瀬戸内海の階子畑 視曉

せつ角の熟柿を猿にもがれけり 全

八、全 八世 有吉宜哉

宜哉は聽松庵十世古萩園五世であるが、明治十五年十一月本庵の文臺をも繼承。

九、全 九世 岡村龍華

龍華は聽松庵十一世古萩園八世であるが、明治廿五年九月本庵の文臺をも繼承。

### 著名なる萩俳諧師の略歴と作句

奈古屋以忠

以忠は初め匡忠と稱し、大原又は大夏とも號した。家號は漏屋堂。文藝を好み、交遊頗る廣く、永く藩政に携はつて功績多かつた。天明元年十月十三日歿、享年七十九。

身は安し明日を思はぬ花の春 以忠

江に洗ふ錦か萩の朝しめり 全

山根南溟

南溟名は泰徳、山根華陽の男、藩公の側儒となる。寛政七年歿、享年不詳。

浮いて嬉し柚の花の香を萬壽杯 右和

笑ひも茂り因み合ふ同士 南溟

### 宗岡棋聲

棋聲は蕉雨園と稱す。寛政十三年東武に行脚し、江戸で白壽坊の教へを受く。紀行文「旅の花」を刊行した。

着飾りし若子も雛なり桃のけふ 棋聲

山吹やうつろふ水も只ならず 全

熊谷豊路

豊路通稱は五郎左衛門、字は芳慶、秋亭と稱す。魚棚の富豪、聽松庵六世蘿月の祖父である。俳諧を好み、京洛の間を行脚し、歸途防州下松で發病し、享和二年十一月十九日同所で歿した。享年不詳。

辞世 埋火の消てはかなし夜半の鐘 豊路

鶯宿園蘇竹

蘇姓名を明かにしない、文化文政頃の萩俳界の長老であり來遊した友左坊を厚遇した。菖蒲庵社中の人により追善句會が催されて居る。文政五年閏一月廿五日歿、享年不詳。

辞世 いや應のならぬ極樂花の春 蘇竹

長嶺以逸

以逸通稱は六郎左衛門、指帆亭と稱す。蘇竹と同時代の人で、文政五年發刊された蘇竹追善句集に、長い前書のある句が載つて居る。八十二歳ある短冊があるから、余程長命であつたことが知られるも、享年は不詳。

追々に船の生るゝ霞かな 以逸

遊び舟や月を右にし左にし 全

### 石津吾朝

吾朝通稱は新右衛門、冬后園と稱す。菖蒲庵系の長老で、同庵二世中坊が八十歳で亡くなつた四ヶ月前、即ち天保十二年五月二日に歿した。雅號に吾朝の吾を取つたと思はれる人など、門弟が多くあり、音聲寺跡に句碑があることを思ひ合すと、同系二世と三世との間に、此の人を入れ度い氣がするも、確證がないのでさし控へた。享年不詳。

辞世 涼しさを待て旱月の首途かな 吾朝

露宙庵中逃

中逃姓名不詳、印章に安易堂及び赤菴と讀めるものがある。金毘羅社献額と安政四年の多越天満宮献額に撰者をして居る。歿年享年とも不詳。

日の脚のしぐれに漏るゝ野山哉 露宙庵

御秋して我身にかへる我家かな 全

如竹庵

如竹庵姓名、歿年享年とも不詳、文久元年人丸社献額の撰者をして居る。又如竹庵点の短冊に龜乘と云ふ印章のあるものがある。

見所は水にありけり夏の月 如竹

木原小僊

小僊は文友堂又は閑月亭と稱す。明治三年四年の人丸神社献額の撰者をして居る。歿年享年共に不詳。

小なれにうつりて涼し松の影 我丈



影をふくみて慕ふ夏空

小僊

高島醉茗

醉茗名は恭、字は敬叔、號は墨潭、杏園にも云ふ。醫家にして書画俳諧をよくす。明治十五年三月廿九日萩八丁の家に歿す。享年七十九。

袖も少し色付にけり百舌の聲

醉茗

留守に來てひきり聞けりほこぎす 全

山本佳兆

佳兆通稱は七兵衛、字は信行、屋號を梅屋と稱す。先祖は浜崎で北國問屋をして居た。嘉永二年大谷に別宅を造り、續いて梅林を拓く。萬延頃東田町にて酒醸業を営む。勤王に盡した豪商である。明治十六年三月二日歿、享年六十二。御正義の貫きて、黒雲もちらして行ぬ冬の月 佳兆  
朝鮮の沖にて 千鳥ばかり大和言葉や舟の中 全  
終りの句はオランダ船で上海まで鉄砲を密買に行つた時のものである。

兒玉可竹

可竹は東田町で時計商を営み、明治十七年來萩した長沼素兄を泊めて居る。歿年享年共不詳。

曳たまふ節輕げなり花の春

可竹

千鳥啼く聲身にしむや氷る夜半 全

前田我丈

我丈通稱は吉右衛門、大月庵と稱し、奥玉江で酒醸業を營

辭世 ありがたや臺の中の月涼し 里井

晝飯に木陰もからぬ田植かな 全

勝津濤聲

濤聲名は兼亮、山縣伊三郎の父である。光風舎、三休庵、光月庵、四海庵、磯馴庵は皆兼亮關係の家屋名である。明治廿八年二月十九日歿、享年七十。山縣元帥の姉である妻壽子も亦俳句を作つた。

出居さりの徳利ほめけり春の雪 濤聲

呼んで來た姉も得さらぬ薊かな 全

桂春保

春保名は小市、初め徐堂と號し、後に春保と改む、平安古總門側堀内の河岸に住し、家號を湖橋庵或は擁流亭と稱した。明治廿八年四月廿四日歿、享年六十八。

降りもせて雨雲出たる暑さ哉 徐堂

耳よけて枕あてるや時鳥 春保

門田蓬萊仙

蓬萊仙名は句馬、通稱駒之助、諱を永莊と云ひ、蓬島仙、龍仙とも號し、蓬萊堂、蓬島軒、蓬翁とも稱し、書名は鶴友亭、狂歌名を栗下軒貞郭と云ふた。九十歳の時歸萩した。凶書頭兒玉愛二郎の需めに應じて扇面に描いた書画が、圖らずも陛下御嘉納の榮に浴した。明治廿八年十一月十九日歿、享年九十四。九十五翁と書いた短冊があるも、是は四の字を忌んで一年繰りあげた爲めである。

む。川向ふの幽草と親しく交遊す。明治廿年十二月六日歿す、享年八十。

辭世 八十歳や今年も時雨雪を見し 我丈  
淋しみの是が極なり秋の雨 全

三輪湖嵐

湖嵐名は不明、秋吟亭と稱す。明治廿一年十一月廿二日歿、享年不詳。

冬の日の行届きたる廣野かな 湖嵐

宗像有鶴

有鶴通稱は清三郎、春曙園と稱し、瓦町の豪商である。明治二十三年十月三十一日歿、享年八十二。

塚の墨尊く光る春日かな 有鶴

雨よりも露の情や女郎花 全

入江護石

護石名は試亮、自然亭と稱す、いつれの俳諧社にも屬せな  
いが、明治十八年東京に行つた際、深川芭蕉庵跡にあつた  
楓の残り木を乞ひて歸り、自ら祖翁の尊像を刻んだ程の熱  
心家である。明治廿四年十一月廿八日歿、享年七十八。

辭世 夕雲の冴えゆく空や冬日和 護石

所縁ある神體移せば風薫る 全

藤木里井

里井は養源齋と稱し、川島小橋筋に住す。明治廿六年五月頃歿、享年七十七。

恐れあり雲の上まで雁の文字 蓬嶋仙

歩ませて子の駕籠汚す葦かな 全

中村梅處

梅處名は文右衛門、諱は祇歡。舊藩時代諸役を經、後に島根縣令を勤めた。晩年歸萩し、河添に住す。明治三十三年十月四日歿、享年七十八。

兎角する中に時雨るゝ會式かな 梅處

雉子の尾につけ、行きけり別霜 全

村上汲霞

汲霞名は與介、狂歌名は想古堂一樂と稱し、土原馬場ノ丁に住んだ。風雅な黄鳥集を編し、居る。彫刻も巧みであつた。明治四十二年七十七歳の時東京へ轉籍した。歿時享年不詳。

みどり出て千世も榮える新樹かな 汲霞

若餅や搗音競ふ笑ひ聲 全

有福春草

春草名は精一。春雨とも號し、養春亭と稱した。醫を業とし、川島小橋筋に住んだ。明治三十三年八月十八日歿、享年七十一。

うたゝ寐の月の戸たゞく水鶏かな 春草

鳴立つや磔にゆれる澤の月 全

永安山河

山河名は重三郎、松樹軒と稱した。明治三十七年に扶桑庵



撰の額を多越天満宮に奉納して居る。歿時不詳、享年も不詳であるが、同献額は還暦と記してある。

島の裾海をはなれて霞みけり 山河  
幾さしもかはらず来るか小松賣 全

花田研月

研月名は忠太郎、義方と號する畫家である。御許町に住す後東京に轉住し、大正五年十一月歿、享年未詳。

花七日噂のうちに過しけり 研月  
手を突けば胸にこたゆる寒さ哉 全

竹重草琴

草琴名は彌壯、二葉園と稱した。清和宅の附近江向八丁に住んだ。大正六年三月廿七日歿、享年六十三。

別れたる友慕はしや遠千鳥 草琴  
秋たつや見馴れぬ雲の西東 全

品川美水

美水名は彌一、彌二郎の嗣子である。大正十三年十二月一日歿、享年五十五。

我影を踏めば音あり冬の月 美水  
朝寒や時を問ひ合ふ小商人 全

田村烏雪

烏雪名は智輔、御許町に住んだ。昭和五年一月廿八日歿、享年七十四。

三日月を抱へて柳の動きけり 烏雪

なめくじの這跡光る暑さ哉 全

水野指月

指月名は義一、河添に住んだ。昭和二十二年三月廿九日歿、享年七十二。

聞馴れし鐘まで凄き冬野かな 指月  
山が家に牛は眠りて初時雨 全

石光菑香

菑香名は新吉、下五間町の富豪で故堂、占春とも號し、靜壽堂と稱した。昭和九年九月十二日歿、享年六十一。

世に高、聳ゆる不二の初日かな 菑香  
見ごころの綺麗に寒し注連かさざり 全

池田芳蹊

芳蹊名は惠三、後に常吉を襲名す。温雅な骨董商で永く俳諧に親しんだ。瀧口如水の歿後一時聽松庵の文臺を預かつたがその時既に病床にあり、立机の披露などする由もなく如水に後くる、こゝに二ヶ月餘、昭和十年十月廿七日歿、享年六十四。

一碗に清風おこる新茶かな 芳蹊  
隣さへ遠き夜なり玉子酒 全

田總百山

百山名は百合之助、有吉宜哉の次男、出で、田總家を繼いだ。幼より画を好み、京都東京に行き、森寛齋橋本雅芳を師とした。號は百山の他、白川、雨谷、捉煙、六木、雙林

等があり、安樂庵と稱した。晩年は和歌に凝り、春蘭と名づくる歌集を出したが、父祖の感化を受け、俳句は早くより作り、明治廿五年既に作句を残して居る。大正五年頓野紅雪、菊屋晚香、山本北汀等と若竹句會を作り、更に他の同志を加へて華陽會を作つた。昭和廿八年一月三十一日歿、享年八十二。

鋤の柄できせるをはたく小春かな 百山  
時雨るゝや窯の烟りの谷を這ふ 全

追記

本項に記載すべき人々が、以上の他に尙多々あることと思ふのであるが、調査不行届のため脱落して居るのである。本名や家號の判明して居るのは、俳諧師名簿に書き加へて置いたので、それに因り本項欠陥の幾分を補填せられ度い

### 來萩した俳諧行脚の略歴と作句

萩は藩公初め高祿の藩士にも俳諧連歌を好むものが多く、又大寺院、富豪中にも、この嗜みを持つ者が多かつたので俳諧修業者が風光の明媚と人情の懇篤に恵まれながら、氣兼ね少なく滞留し、悠々風月を楽しむに都合の好い土地であつた。そこでそれ等の人々が残して行つた短冊などの筆跡が比較的多く、土地の俳人との區別が困難なこともある因つて余は諸種の資料に據つて、その人達の略傳を作つた然し時代によつては少しの遺漏もないと思ふが、時代によ

つては全くその事實を知ることの出来ない場合もあると思ふ。結局不完全な記事であるが、それでも無いよりは余程よいことと思はれる。當然この編中に納むべきである長府の菊舎、越前の歸一坊、越後の極處三名のこゝは別項に特記してあるので此處には省いた。

里村玄陳

玄陳はかの紹巴の孫で、泉州堺に住んだ有名な俳諧師である。萩の人であるこの説があるも、余はそれを疑問として居る。萩へ来る時の紀行文があるとのことなるが、やはり行脚として来た時のものと思はれる。寛文五年一月五日歿、享年七十五。

大淀三千風

三千風は伊勢國射和村の人、呑空と號し、仙台に住すること十五年。その後全國を周遊し、日本行脚文集を著した同書によれば九州旅行の歸途、豊浦郡より船木、山口を経て貞享二年四月末日來萩し、東光寺に一泊し、次の連句を残して居る。

風雲便あり山路試むほこゝぎす 萩東光寺考尹  
出船の餘波茂る萩の津 三千風

雪吹庵以哉坊

美濃派五世の安田以哉坊は師匠田中五竹坊の意をうけて萩へ来たことは、古萩園社中が弘法寺へ建てた句碑によつて明かであるが、その年月は詳かでない。







岡田魯人

魯人名は不明、東京の人、義仲寺無名庵十四世である。  
明治廿一年十一月來萩。

尾のこれしあるのが兄かかわすの子 魯人

時々庵其一

其一の姓名、生國共に明かでない、明治廿二年六月、廿三年五月、廿五年一月に來萩。

春待つや手づくね窯の地ごしらへ 其一

長尾眞海

眞海名は不明、讃岐國白鳥の人、高桑蘭更を初世とする南無庵六世である。明治廿二年九月來萩。

かへる方ありてさびしや秋の空 眞海

等原流芳

流芳名は不明、越後國西蒲原郡杉名村の人、明治廿二年十月秋に來た。それより五年前山口に來て、當時山口に居た萩の俳人秋水と兩吟などを試みて居る。

雨も今朝青く降るなり若葉山 流芳

涼月庵禹兆

禹兆の姓名は原田正逸、山口縣佐波郡植松村の人、明治廿三年五月來萩、宜哉及び布仙と夫々兩吟をして居る。

行き過の人酒嘆し朧月 禹兆

自在窟以兆

以兆の姓名は才道工内、山口縣佐波郡牟禮村の人、明治廿

四年八月來萩、宜哉清和布仙と四隣などをして居る。

萩の露分けて貰はん草の花 以兆

白雪軒里風

里風の姓名は鈴木陽堂、武藏國厚川の人、明治廿四年一月來萩、宜哉との兩吟などを試みて居る。

夜松魚の來たか隣の水遣ひ 里風

河村塙芹

塙芹の名は義三郎、山口縣都濃郡中須村の人、明治廿四年夏より秋にかけて長く萩に滯留、松宇との兩吟などを試みて居る。

町長き置座の軒や夕納涼 塙芹

木國庵虎山

虎山の姓名は明かでない、和歌山縣の人、明治廿五年暮から翌年正月にかけて萩に滯留、宜哉との兩吟などを試みて居る。

梅寒しまた浮きたぬ水の垢 虎山

船川

船川の姓名、生國も明かでない、實は來萩のことも不確實であるが、宜哉の明治廿五年度の發句書取集に行脚船川として作句が載つて居るので、記載することにした。

入船に影さす山の櫻かな 船川

雪雄

雪雄の姓名は不明、周防の人らしい、來萩の年も明かでない。

いが、比較的多くの短冊を萩に残して居る。

初めて草琴詞長が芳庵を訪ふ日は天長節に當り、御盃をいたさければ

幸なれや桐のさかづき菊の酒 雪雄

千秋庵可仙

可仙の姓名、生國とも明かでない、大正五年十月來萩、只月との兩吟などを試みて居る。

丙辰の仲秋行脚の道すがら、只月雅伯を訪ひ、偶菊の日に照らされあるを見て

菊の香や雲間縫ふ日の翻れ照 可仙

山陽堂慶山

慶山の姓名、生國とも明かでない、大正五年十一月來萩、只月との兩吟などを試みて居る。

只月雅伯と別を惜みて

白菊に心のこして歸りけり

巖松洞月仙

月仙の姓名明かでない、岡山縣都窪郡庄村の人、大正の末年來萩。

薄月の水にもさけず啼田にし 月仙

花本聽秋

花本十一世聽秋翁は昭和二年二月と昭和十年八月に萩、山口に來り、長門峽開發に盡力せられた、峽内に一時聽秋橋の出來たことは、人の知る所である。

追録

姉妹ともいはん切窓秋きり籠 聽秋

萩は山陰街道不便の地であり、京と九州との往還の道筋ではない。然し二州の政治及び文化の中心地であるから、態々尋ねて來る人も多かつた事と思はれる。西山宗因、里村玄碩は共に九州の出身であり、故郷への訪問、歸住の際などには萩に立寄つたのではないと思はれる。余は二人の筆蹟書幅を萩で入手して居る。又余が所蔵して居る俳句帳に自筆の句を記入してある人々の中には、萩に來たのであらうと思はれる者が尙あるも、論據が薄弱であるので記さぬことにした。

西山宗因

宗因は元來肥後八代の人、談林派の鼻祖で、梅翁或は西翁とも稱した。京阪に居ること年あり、連歌を里村昌琢、松江重頼、學んだ。後全國を周遊し、その俳風天下を風靡した。天和二年三月廿日歿、享年七十八。

塩風呂に入江のあしも若やぎて 宗因

梅花頭に壽ぶく名なりけり

里村玄碩

梅翁(熊谷家藏)

渡邊玄碩は豊前四日市の人、上京して和歌を日野資枝、連歌を里村昌逸に學んだ。連歌の宗家里村玄川の養子となり、後江戸に出で將軍家より俳諧師としての祿を賜はつた。晩



年歸國、文政四年歿、享年六十。

ふく風に餘所の梢を落葉かな 玄碩

附記 支考の跡を嗣いだ盧元坊は各地を周遊し、美濃派俳風の宣揚に功績のあつた人であるから萩へも来たのではないかと思ふ方があから知れないが、自筆の手紙の中に「むかし西國行脚、節も秋城下へは經廻不仕候處獅子門俳風御返志の御衆中も数輩御座候様に耳老叟よりも被仰聞候」云ある。否定の資料として記す。又萩市下五間町石光進吉郎氏所藏の俳句短冊中に、娯遊（能登輪島）、晚頼（能州輪島）、寸董（能州輪島）、砂雄（能州）と署名したのがある、これ等の人は何時の頃か來萩し、石光家に滞留した行脚ではないかと思はれる。

### 田上菊舎と萩

萩への俳諧行脚者として菊舎を取り扱ふのは、不自然と思はれる程、萩と菊舎との関係は深い。因つて菊舎の風貌を傳へる爲め、俳句以外のことまで附加して、この項を綴ることにする。菊舎は安永九年晩夏廿九歳の時、長府を門出し仙崎、通を経て萩に來り、清光寺開心院老師に就て得度を受けて尼僧となつた。

秋風に浮世の塵を拂ひけり

萩では竹奥舎其音から美濃の宗匠、朝暮園傘狂への添書を貰つた。同尼は美濃より江戸に至り、野村白壽坊に非常に

世話になり、居るこゝ三年に及ぶ頃、上京して來た其音に廻り逢つた。

長き旅も爰にこうした力草

或年萩城の芳花園壽鳥婦の許に春を迎ふ。此ぬしは此地に雅友もすくなき折からより、われをいたはり道のちなみいさ深かよりければ、

めぐり來ては年籠りけり芳花園

この前書に云ふ或年とは判明しないが、其内容より考へ、安永八年春から長府に居たやうであるから、その暮より春にかけてのことかと思はれる。又或年萩に來り、聽雨の別莊揃々亭に春を迎へて居る。是は享和元年と思はれる。

海にむかふこゝろや直に初手水

翌年であらう、また萩に來り、宗岡氏の別莊靜壽亭（羽衣野村に在り）に宿り、元旦の詩などを作つて居る。

漢峰旭を捧けて瑞光開く 雲は羽衣に似て雪は梅に似たり 孤客春を迎へて相望む處 坐ろに疑ふ身は是れ蓬萊に在るか

入日山田如用、宗岡花菫二君客居を訪はれ子美一聯を分ち、林字を得

同人入日此に相尋ぬ 何ぞ限らん春光苑林に滿つ 山館賓を迎へて別物無し 鸚鵡眼院彈琴に和す

また此次の年も宗岡氏（花菫の息）の蕉雨園に宿り、同夫妻の信情にいたはられ、大年をさへ重ね、贈答附合の詩

句など數々を残して居る。

### 首途

客路天涯自ら通ずるあり 浮雲流水思ひ何ぞ窮らん 東西南北踪跡無し 日夜瓢蓬只だ風に任す

切れ風の雲に吹るゝ心かな

又文化二年の夏萩に來り、東光寺の大愚和尚と應酬し、栗山氏邸、明倫館などを訪ふて居る。

立秋園手栗山氏の春水亭に遊び琴を彈す

梧桐疎雨度り 一葉新秋を報す 閑坐琴を彈する處 鳳聲何ぞ必ずしも求めん

何鳥か桐にしらべて秋立ちぬ

同秋明倫館に遊び恭く短絶を賦し聖壇に献じ奉る 猗蘭操奏し罷む 景仰亦何をか言はん 山水今古無く

泮宮千載に存す

盡きの道の香は爰にこそ蘭の風 文化六年の暮復た萩に來り、八丁御殿に罷り出で、御傍近く風雅の因みを重ね、藁々園に宿つて居る。

歳暮繁澤雅士の藁々園にやどりて

こゝろこゝろに洋々たりな年の波

明くれば文化七年二月とり越しの耳順賀の催しが各處に行はれた。是は自分からも希望したようである。

一字庵主の年賀を祝ひはじめ侍りて

開きかける八千代の色や玉椿 藁々園舒吹

此他に八十翁竹奥舎他十五名の祝句もある。尙逍遙館、風竹園夫妻も次の句を呈して居る。

此春耳順にちかき賀を壽き開かるゝ一字庵ぬしの齡を祝して

結ぶ紐も猶三千こせの春永ふ 風竹園女桂露

一字庵尼此八江萩に滯杖のうち、近き耳順を祝はるゝにぞ、先づ恐れ多き玉殿に賀宴を催させ、老が心を慰め玉はりしより、信友知音も壽席を開ける折から、彌生半の頃、風竹園にも賀筵を敷き、いさゝか壽杯をすゝむるに、花前に蝶舞ひ、柳上に鶯囀りて

ますゝ雅興を添ぬるゝ、不老の仙宴なるべし 永ふ結ぶ花の姿や千世の紐 逍遙館荷風

或日大橋を駒の離れて飛渡るを見て

走る駒は誰が油断ぞ櫻時

文化辛未試毫富士山の畫に（他前書略）

十かへりの松を裾野や花の春 「これより夏秋の雅事変相爰にしるさず。初冬に至り、一ヶ月は自流亭といふを假の茶庭に、開爐の客を呼入て、日々清味を汲み、例の雅集あり。此外八江萩八勝、又は護國山十二景何れも詩譜畫題あり」との同尼の文章があるから

此歳一年は萩に悠遊したのである。明くれば萩を去る文化九年である。

逍遙館、風竹園御ふたかたの雅愛の中に目出度年を



重ね侍り、初春八日節分に興じて

憚りな福の敷寝やたから舟 菊舎

こゝろゆたかに千金の宵 逍遙館

自から松吹風も和らぎて 女風竹園

新年琴歌を作り、私かに南風に擬す

春風の生ずるや 以て雲遊の情を縦にすべし

春風の時なるや 以て雲遊の詩を阜にすべし

こゝろ言葉吹る、時や花の雲

「此一曲は琴を携へ、明倫館へ詣で、聖祠の壇下に奏し奉りしなり。猶はた即席に儒學の諸君子、其報の爲きて、音楽を催しもてなしたまふ。ありがたき事共いふばかりなし」  
とある。

諸君に留別し奉る

身は風雲の過客にして、行も定めず歸るも期せず。此地滞杖年を越えしも、舊友交遊の雅情にほだされし故なればならし。しかはあれど、鳥鳴き花咲く頃になりたれば、又ぞよこご方に遊吟を移さんと、琴を抱き別離のこゝろを諸君子に告げ侍るこゝ

めぐり／＼酌む四海の花霞

竹奥舎の送別の句こそその前書

明くれば三三の先ならん、一字庵の風尼この八江萩に頭陀をこゝめ、舊識新友の諸雅君に取持たれ、殊に去年の冬よりは風竹園の御慈愛に別莊をかまへ其謝恩もさる事なが

ら、かねて上京の思立あれば、後の衣更着二日春風に誘はれ首途ある一心金剛に恥し、老が離情のわりなきもそこ／＼に、たび／＼の吉例なる郭外に送り出て、黙して手を分つとて

切一風の氣に旅立ち雲千里 竹奥舎

七十歳以上の署名ある菊舎の書畫が萩に相當あるも、皆長府邊で書いたものであらう。六十歳以後に萩に來た様子は

この他確實に萩で作つたと思はれる句を左に掲げる。

樹々亭の山窓にひとりかり住して云々の前書ありて

おもしろしこだまに里の餅の音

水にちかき樓臺は先づ月を弄ぶこかや、幸ひなるかな河添の御やかた君、月華の情淺からずて、うち

／＼雅名まいらせよとの命を蒙り奉りて

宜爲

弄月觀

水交君

折にさそふ眞如の月の冴こゝろ

### 越前福井歸一坊

歸一坊は文化十一年九州行脚の歸途、萩に立寄り、葦分の胡枝庵に十日餘り滞留し、其間其音、里川達と歌仙を試みたことが、歸一坊長城帶杖拔書なる寫本に残つて居る。これは半紙四つ折十二枚の小冊子であるが、其音住宅の有様

里川の永年の交情、葦分の交遊の模様などが知られ、且つ葦分師と誤傳せられて居た胡枝庵の號は葦分師であること、古萩園連の號(廿八名分)、其音、里川の年齢などを窺ふ好資料である。拔録を次の通り更に拔録する。

竹奥舎にて(前書略)

初めての涼しさも竹の奥深し 歸一坊

いぶせかるらむ残る蚊にさぞ 其音

竹奥舎より歸一坊へ

見せばやな伏屋の軒に洩る月を 竹奥舎

鹿も鳴くべき山も程近 歸一坊

前越福井なる祐阿雅老より引續きて五十年來、書音の困みをかさねし歸一御坊、筑紫の歸節を萩臺に寄せ、草庵を叩かるゝにぞ、年ごろゆかしかりし積情を散す

咄しつきすもそつとは夜の長ふとも 古萩園

月に嘯く老も老同志 歸一坊

胡枝庵にて(前書略)

似よかしな因みも松の色替へず 歸一坊

先と枕を月の夕暮 葦分

胡枝庵にて(前書略)

營ませはや折からの干蘭盆會 葦分

月の精舎の萩も手向に 歸一

留別

假そめ十日餘り胡枝の芳庵に慈愛をうけし歡びの数々は

云ひも盡せし、唯ひふの名残を惜む中にも、いつか吾が國の吉崎なる、蓮如上人の御舊跡へ來詣し給はんと、叫きあるにぞ、其比再會せばやとの約を樂しみと別れ侍る。

縁にしあらば吾が吉崎で月見せん 歸一坊

附記 文中にある福井の祐阿坊は、寛政二年三月京都双林寺であつた芭蕉日年忌には里川、菊舎など、共に其會式に列して居る。それから見ても斯界では相當名を知られて居た人であらう。

### 春日庵極處

極處は越後の人、明治廿一年一月五日萩に來り、二月九日まで三十六日間滞留し、其間増山可清、前田我丈、田村烏雪、伊佐布仙、小野和樂、林一松、竹重草琴、小田禾巷有吉宜哉、宗像有鶴と兩陰歌仙を試むるなど、萩の人々に深い印象を残し、その文識の豊かなこと、當時萩への行脚者中で、嶄然頭角を現はして居た。萩の景色を讀んだ句などは次の通りである。

水鳥の空に啼くなり指月山

雪にまで阿武の松原千鳥啼く

鶯もふところ子なり奥玉江

蓬萊をありのまゝなり志都岐山

橋本御許町唐樋の町々を過ぎて家並中々厚ふ辻々廣らかに見ゆるあたり田町の豊國居に入る



家藏の墓ぞぬくし春霞

翠竹園にて

日の影もみざりや苔に驚に

仁者の樂しむこいへる山あり鈴虫が嶽白水山左右に別れてうしろに覆へり智者の愛すといへる水あり白水より出て玉江川清く流れ阿武の海に入る花鳥風月四時の景物に富みて世塵に交はらざるを大月庵といふ

月雪や花は其日のありあはせ

極處

遊べく友千鳥呼ぶ

我丈

留別

雲に倣ひ水に随ふ身は溶々として流れどまるべきにあらねど風士のさちなるかたぐいにはさすがに袂を別ちがたくて月日の移るに驚きし事もあまた度びなりしをや長門の旅寐に萩の風士達を推敲して其芳名良性の誠をしりて交りを重ねるも水の如くにして味なければ飽事なく或日は志都岐神社の公園に遊びて心を澄し或日は長添山のぼりて美景を恣にしぬるなどすべて草の名の枕の名にも似ず歡樂にのみ日を送りていつしか年暮れ陸月もなかはを過ぬあふた人の世に名を芳ばしう傳へても逢ひ見ては逢はぬむかしに思ひ劣りて勝るは百にふたりとは稀なるものを風士達は寂寂り都會の翁にも頼にまさりぬべく山と水にさへすぐれたる處を得て風月に清く富たれば

### 嘯月舎文臺

最近萩市川島勝津吉朗家所藏の多くの短冊を拜見したところ、嘯月舎の文臺云ふものが既述萩三社の文臺の他に存在し、竹部嘯月舎より、其歿後三十四年を経て、勝津濤聲がそれを繼承したことが明かされた。明治廿六年十月廿六日濤聲が三光庵で催した故嘯月舎の追善會は、有吉官哉の手懐紙の記事文では判知することが出来ないが、實は濤聲が嘯月舎の文臺を繼承した披露の連歌會であつたのである。その證據として宜哉、龍華、中村如水三氏の祝詞を其前書とを記すことにする。

嘯月舎宗匠の文臺のあこのしげらく休みたるを起して永久に傳へ師恩に報ひ侍らん今年この冬時雨月の央三光庵主 發起せらる、薙に連りて  
すゑ廣に開く香ひや月の牙 宜哉

故嘯月舎の文臺再興をはからる、濤聲君の抽心をよみして

雪の花月の明りや文の窓 龍華  
嘯月社武部氏の墓は萩町平安寺にあり我祖の墓地を同うす我祖在世の時提携供に慕参す其時指し示し彼の墓は祖翁の流れ酌へ教へを廣められし武部氏の碑なりと教へし事あり爾來年を閱する十有余年なるも今尙心頭にあり忘るゝを得ざる今日となり勝津濤

其名もおのづと歌はるべしと人々の愛情勝地の名残おもふにつけても雲に倣ひ水に随ふてとどまるべきにあらぬ身の山鳥の尾にたぐふまじ長々しくも結びたる袂を別ちては俱に天地の一涯とへだゝるを歎息して 極處

厚い禮水踏割る別れなり

追記 本書活刷中、清和宗匠の孫にあたる増山三朗氏を訪ふた所。左の二名は清和翁に關係がある行脚であることを知つたので追記する。

西島壽松僊

壽松僊名は重藏、娛嬌も號す。豊浦郡神玉村大字神田上村の人。來萩時は詳かでないが三月一日の書附があるから清和翁が古萩園繼承中の明治廿八年二月下旬のこころ思はれる。

兼て厚情をうけらる百霞井の主清和老仙の芳扉を伺ひ倍慈愛を重ねるうれしさあまりありて

蒔かぬ因生へる心地や道の縁

娛嬌

鶯や千金あまり朝の月

壽松僊

利得

利得姓名住所も明かでない。來萩の時日も詳かでないが「雨の萩そひ寐もしたき姿かな」とある短冊の裏に行脚不名知し添え書がしてある。これと全く同質の短冊に同筆跡の次のものがあるので、行脚を推定した。惜まれる涙にまけし春の雪 利得

### 嘯月舎文臺

月雪の千代植繼て松の宿 如水  
一體に筆寫記事を簡略にするため、句の前書を略するところが多いのであるが、その前書が如何に大切なものであるかを、此例によつても知ることが出来る。即ち如水の前書によりて直に其菩提寺を知り、延いて歿年を戒名を姓名を探索し得たのであつた。更に次に示した柳光亭如風の小品により嘯月舎が諸門弟を指導して居た状況が想見せられ、又嘉永三年は朝杖(宮中杖)の春即ち八十歳であることを知り得るのは喜ばしい。

こころ嘉永三とせ朝杖の春を迎へられしは嘯月舎雅老なりさるに此夏卯の花のさかりに吉辰良日を撰び門下の社友を招き祝宴を開らるゝに予も其席葉に列り祝盃を傾けく猶も千歳の榮壽を祈り興祝し奉る

嘯し立て開く扇や齡の賀 柳交亭 如風

竹部嘯月舎名は宣衛門、俯庵僊又は俯庵仙と號し、菖蒲庵系の人と思はれる。萬延元年閏三月廿五日歿、享年九十。

清萩のすれ合ふ夜の寒さかな 嘯月舎

濤聲はこの文臺を繼いだか、其間僅か一年四ヶ月で、その後の繼承者はないやうである。







夕立や雲見て急ぐ長繩手  
 虚に實に味を知りゆけ氷餅  
 草に降る雨 音さく夜寒かな  
 神迎ひ爰鶴の森や花の下  
 月雪の咄聞ばや千松島  
 咲くものにみな香はあれど梅の花  
 植ゑ仕舞ふ田に美しき月夜哉  
 親鸞聖人 ひかりさす石の枕や雪佛  
 清和君の文臺 此道の末廣がらむ扇形  
 開を祝す 夏乗せて白雲出たり峰のうへ

右麥 徐風庵 子琴 魯松庵 一畊 虚白 迂言 夜城 其馨

以上の内百茶坊は天明六年夏には菊舎を伴ふて九州行脚をして居るし、其遺品も比較的多いので、恐らく來萩したと、思はれる。

### 長藩連歌衆人名録

本項に記した人名は必ずしも俳諧に堪能な爲めであること云ふのではない、一通りの心得のある藩士は職責上年頭の嘉例として、連歌會に列して居たものもあらう。公子姫達で尙幼弱のものもあり、又御代として初めより代人を選定して居ることも多い。然し藩公にても齊熙齊元兩公信順君などは、立派な俳諧人であり、藩士にも宗匠級の人が存在する。本標題を安部家系統の俳人と仕やうと。先づ考へたが安部家が擡頭する以前の人もあるので、掲出の通りとした。

綱元(長府藩三代)、元次(徳山藩三代)、廣透(岩國藩七代)、廣頼(福原)、以下連歌御連衆 等原又兵衛(宗匠)、桂彌左衛門、山内半右衛門、入江彌兵衛、林勘兵衛、御郷五左衛門、坪井惣兵衛、張吉兵衛、東條市郎兵衛、藤井左兵衛、中村半左衛門、坪井彦右衛門、檜崎源七。

正徳三年 昌億、昌純、紹兆、其阿、信政、昌長、清親  
 通章、政幸、昌築、仍民、忠元。

寶曆二年 和貞(安部吉左衛門)、光久(井上善兵衛)、弘昌(宇野與一左衛門)、介通(藤井正兵衛)、忠周、奈古屋與三右衛門、安成(村田貞右衛門)、芳及(林久内)、隆勝(御郷五郎左衛門)、正勝(長沼九郎右衛門)廣嘉(佐世)

寶曆六年 忠政、宗珉(正燈院)、貞次(飯田孫右衛門)正之、武貞 安部新左衛門、房經、直道、元周(清水長左衛門)、景明、種親。

寶曆八年 重廣(重就養子)、岩之亟(重就四男五歳)、永丸(重就三男六歳)、廣定(毛利内匠)、元連(毛利七郎兵衛)廣堯(益田越中)、廣慶(完道外記)、廣通(益田隼人)、祐世(伊藤左源次)。

寶曆九年 誠姫(重就養女)、定英、祥正、忠貞、光資、時連、光廷、滿令、勝之、勝長、恒尙(木梨)、清典、任式、武明、直次、至敦、瑞迪(松島)。

寶曆十年 眞喬(林小左衛門)、信詮(福井宗六)、宇野五郎

然し明和安永頃安部家指導の下に行はれた藩士邸や、正燈院(行はれた會合衆の名)加へてあるので、この標題も尙びつたりせぬ嫌ひはある。この資料に就て云へば、初めの萬治寶永のものは御規式帳に準據し、正徳のものは余が所藏(古記録)により、寶曆二年より明和四年に至るものは奈古屋家所藏の俳諧覺書に據り、安永九年より天明五年に至るものは余が古記録に據り、寛政九年より明治二年に至るものは、山口図書館毛利文庫の御連歌歌集に據り、是に藤澤武平氏所藏の嘉永六年及萬延頃の記録中より少しく補充したものである。斯様にして相當数の人名を集め得たが、もよより全部を網羅したものではない。掲出の形式に就て云へば、人名の重複を成る丈け防ぐため、初めの大項には其當時の人名を悉く載せたが、それに近い年度のもの即ち小項には、新しく登場した人名のみを記した。然し大項の変る時には前出の人名を再録した。本項は俳諧を連歌と關係の深いものとして作つたのであるが、寧ろ連歌と關聯の多い歌人名簿としての方が、利用價值が多いやうにも思はれる。

萬治二年 完戸就附(御名代)、以下連歌御連衆大和七兵衛、福岡彦右衛門、林喜左衛門、杉岡九郎兵衛、國重又右衛門、遠藤印佐、岩佐圭庵、村尾意安、土方傳右衛門、中村支春、鷹屋清左衛門、齊藤六左衛門、國重熊之助 寶永二年 博(吉廣)、弋信(紀伊守)、元重(綱廣五男)

兵衛。直明(大田忠左衛門)、應之(桂五郎左衛門)、惟昌(田北太郎左衛門)。

明和二年 通定、武貞、以忠、禪密(正燈院)、直堅、應之、以成(乃美)、正之、奉至。

明和三年 直賢(井上)、元恒(國重又右衛門)、方昌。

明和四年 義方、通乘、以昌、信詮。

安永九年 武貞、行貞(安部吉兵衛)、就祥(益田又兵衛)、就益、清通、規俊、井原、俊明、種克、信助、直好井上、訓連、能文、惟門、弘時、尙俊、清安、隆陳、是彌、貞厚、儀直、恒知。

天明三年 就恒(兒玉)、頼記、直孝(井上彌右衛門)、茂正直祐、通乘、政人、宣直。

天明五年 就貞(毛利次郎兵衛)、徳充、惟昌、宣方、千直知眞、正孚、俊喬、頼雄、俊方(福原)、正武(奥平)、弘恒(宇野)、政武(三浦)、俊助、忠良(熊野孫左衛門)、乘英(尾崎)、明矩、玄恒、順英(北川)、政祐、忠福、通直(藤井)、勝尹、方信、恒知。

寛政九年 親善(重就六男)、熙成(齊熙)、恒五郎(治親三男熙和)、哲之進(治親五男熙載)、ハヤ之進(治親六男忠篤)、利謙、直次郎、就馴、經忠、直孝、顯善、景行、基政、仲貞、友直、信通、郷美、繁世、景幸、房俊、景孝、宣猛、詮良、俊貞、熙和、春明、正長、遂良、勝友、誠一、有文、熙載、熙續(治親六男忠篤)、景明、如章、師勝、



時貞、以文。

寬政十一年 利壽、勝尹、良守、富貞、實有、忠篤、就壽、經忠、次雄、知忠、兼明、外容、長仍、維德、政教、正倫。

寬政十二年 征則、安貞、通啓、正方、政永、元義、房貞寄、信武、胤英。

寬政十三年 俊直、以行、直通、知清、信幸、正之

文化二年 德賢、通欽、豐常、勝備、遠紹、寬明、方辰之胤、經賢、希健、光德、定通、勝樹、高昌、鄉明、

文化三年 正克、實友、廉常、政順、泰通。

文化四年 泰賢、直教、定尙、俊昌、忠昌、清明、允中道兼。

文化八年 寬齊熙、德丸、齊房長男六歲歿、實延、經禮房俊、久悠、直憲、武明、辰直。

文化九年 惟貞、方列、行貞、政人、勢宏、正榮、弘友知遠。

文化十年 知和、忠言、房純、忠規、實成、朝通、彰、興讓、宣光、貞章、昌綏、延賢。

文化十一年 貞政、藤賢、忠和、以正、行正、恒雄、忠美、景寧。

文化十二年 保三郎、齊熙、定祥、供久、荷靜、宣充、盛住、景裕。

文化十五年 惠之助(信順)、爲貞、通知、貞利、政行、

爲政。

文政二年 鄉之助(信順)、倫直、高昌、信政、正道、邦貞政倚、時習、通明、時鎮、定祥、俊雲、誠明、齊元、薰貞、方壽、正敏、正忠、茂胤、忠道、信將、鄉秀、延惠、景純、侑敬。

文政三年 延世、勢宏、俊文、信當。

文政四年 長好、武昭、忠興。

文政五年 忠和、信幸、安定、善、直行。

文政六年 長興、忠幸、信順、盛良、長民、教善、文質政達、倫直。

文政八年 幹(齊元)、齊熙、常則、卓裕、長好、惟貞、慎憲、正容、經禮、顯信、誠明、元、寬、高昌、貞直、直信、爲政、保三郎、齊廣、齊熙(同稱)、鄉之助、元義

就義、行正、德政、久道、忠道、房純、倫直。

文政九年 崇廣(齊廣)、猷之進(敬親)、信敏、貞儀、喬音、相規、盛德、庸信、亮、就壽、安定、朝良、正兄、之基、景員、遠純、行範、宣充、貴恒、時行、良恭、茂、胤後、良、勢時、定愛、正方、勝敬、俊文、晴峯。

文政十年 朝良、隆禮、信古。

文政十一年 正榮、正義、安忠、俊純、武溫。

文政十二年 豐、高尚、正愷、資敬、以庸、久俊、有信幸尙、直憲、通遠、詮和、政道、眞懿、堅定、直行。

文政十三年 美辰、忠金、隆宣、兼倫、庸信、利義、

恒貞、忠貞、方賢、賴匡、弘政。

天保二年 齊廣、通真、有信、政恒、基之亟、兼高、說忠顯、安綱、顯信、長道、信年、幸忠、隆之、喬盈、中

天保三年 教明、安忠、得、盈貞(眞貞)、廣鎮、幸周、直述。

天保四年 忠朝、勝善、有伸、勢實、足尙、信之、守本長道、重達、光實、直好、直祐、顯忠。

天保五年 實充、乘憑、眞明、常政、信與。

天保六年 經貞、三省、鄉善、實堅。

天保七年 弘長、住顯、景張、方順、利見。

天保八年 義章、舜、政達、勝三郎、賴溫、安忠、以德常通。

天保九年 鄰、元用、恒道、經章、實忠、泰恒、忠行、溫、正修。

天保十年 信成、恒道、就軌、景純、勝正、義質、武君一學、寬備、尙友、友滿、隆宣、政恕、勝豐、良規、

天保十一年 方順、景寶、廣篤、通亮、善茂、時習、氏燕

天保十二年 信好、高掃、清行、景帆、敬義、榮實、誠道景行、正直、武則、直敬。

天保十三年 政達、景治、賴方、盛倫、重固、

天保十四年 教德、元運、信重、恒道、延世、友滿、通遠、景貞、光新、直方。

天保十五年 忠氏、方信、良則、通亮、忠行、萬、一裕。

弘化二年 惟一、龜之進、種豐、賴功、仲綱、賴毅、晟雅、政和、俊弼、氏仲、豐迪、弘充。

弘化三年 通明、實義、弘達、種及、道兼、俊則。

弘化四年 泰溫、恒升、氏昭、宗秋、政因、進忠、正贊奧貞、政久、貞正、信昌。

弘化五年 寶信、親俊、良道、俊偶、次善、通胤、正通。嘉永二年 方美、直俊、本民、景次、實和、引充、希文

政敏、久敬、行道、弘遠、信主、實信。

嘉永三年 尙朴、勢延、景元、正篤、安平、利亮、安信嘉永四年 昌之、盛政、氏徵、正章、實晴、俊德、汎方

高正。

嘉永五年 口ク尉(元德)、禎之亟(順明)、宗德、繁完、忠資慎、久孝、正展、重恒、高尚、尙克、實方、政純、貞篤。

嘉永六年 元周、貞正、棟政、直美、景雄、明則、希哲直薰、正篤、貞寬、和至、宗城、宗紀、永鷹、保鷹、廣

封(元傳)、兼翼、直清、眞貞、以。

嘉永七年 倫富、俊續、直貞、進忠、元紀、祐順、種介。

安政二年 鄰、定廣(元德)、信順、禎之亟、元周、信臣節、實信、廣篤、經幹、親俊、景張、盛倫、泰溫、春善顯行、種德。

安政三年 和臣(眞貞)、福臣(惟貞)、中、貴和、清鷹、有聲、宣忠、勢延。

安政四年 順明、道芳、常通、義信、安之、利義、正規

三二



俊續。

安政五年 廣蕃、正敬、恒彰、溫知、晃。  
安政六年 正臣(眞貞)、通義、澄平、通諒、直薰、元備  
資始、善繁、倫直、孝永、一、常倫、榮實、包政、道政。  
安政七年 成亮、教興、光知、通亮、勢實、景海(橋崎  
五百輔)。  
萬延二年 武揚、頼温、好直、種介。  
文久 年 豊範、長吉、正常。  
慶應二年 重吉(敬子養子)、元純、親徳。  
慶應三年 廣封、興丸、(元昭)、知政。  
慶應四年 成信、教。  
明治二年 左京亮、元蕃、芳之助、元張、徳風。

### 萩俳諧師名簿

本文は初めの寛政期のものを除いては、主に萩の三俳諧結社關係の書類から抜き出したものであるが、時代によつて存在資料 數に著るしい差があるので、その影響を受くるのは止むを得ない。又神社獻額の内からも少しくとり入れたが、これには他郷の人も混入して居るので、その撰擇には注意を拂つた。記載の形式が前項人名録とは少しく異なり、當時の俳人名の比較的好く纏つた時を中心(大項)としその前後の年のものを小項とし、大項中にあるものは小項にはあつてもそれを省いた。大項を変へた時には前掲の人

も再録したこゝは人名録と同じである。他國人の名は勿論入れぬやう心がけたが、或は美濃方面のものが少し加つたのではないかと恐れて居る。

寛政二年 右和(自然庵、不止齋)、南溪(山根泰徳)、其跡、羽觴、梅子、一駒、六花、洪三、和弦(松郊齋)、金波、票朝(先後庵)、月雫、其花(苞閑亭)、露秋、車水、里遊、其雪、指香、蒼書、露袖、其玉。  
寛政四年 武貞、政全(和智)、直由、以成、成可、能文、何有(壹亭)、俊幸、正字、能文。  
享和三年 似遊(中村少流亭)、風睡(中村)、亞聲坊、梢鳥、李一(溪月亭、求故齋)、仙里(桃江舍)、尖羽、烏強、橋下、房、机涼、蘆風、尾吹、里紅、樂之、徐水、里友、如竹、度考、梅友女、一步、壺遊、花睡、白里、可應、無色、燕之。  
享和元年 其音、花苗(宗岡)、以嘯、花郷女、其兆、市、曉、棋聲、花道、冬の坊、其時雨、乙二、豊路(熊谷五郎、衛門芳慶)。

文化十一年 如水(碧江庵)、里仙(百菊舍)、君溪、完戸、山館、古調、金龍、五麥、奇流、夕甫、寫蝶女、里代女、雨梨宇、琢之(釋)、紫巖(釋)、不嬉(釋)、梅豊(釋)、蘇竹(鶯宿園)、杜考。以逸、指帆亭長嶺、八郎左衛門、梅里、時風、茂陵、夫川(加邊古萩園)、其棧、南枝、東渡、雨調、里川(古萩園)葦兮。其音。秀孝、以三、不改。

文化七年 舒吹(繁澤奏々園)、淇澳、壽鳥女、桃戎(菖蒲庵、娛中坊)、聽雨、素信尼、慕香、露秋女、花香(小倉實和母)、里曉、裏遊、調紅、可朝、荷月、枕之、意白、荷風(逍遙館)、桂露女(風竹園荷風妻)。  
文化九年 波松女、許山。

文政五年 蘇竹、娛中坊、文里、以逸、里鶴、鼠六、梅里、雨柳、味朝、可由、梅甫、霞晴、一咲、梅豊、翠羽、榎山、桃二。  
天保十二年 吾友、先路、朝花、以帆(早川)、鼠六、虛舟、吾曉、湖雨、尖鳥、露白、淇園、湖兆、茶好、茶兎、湖秋(橋本)、徐來、蝶二、霞吹、默花、如臍(稻原)、曉鳥、其桃、青眺、素香、徐考、梅枝(井關三郎左衛門)、友水、雨麥、湖梅、稻窓、利風、三樂(久坂良迪)、可睡、(河井)、烏林、金砂、其白(長野)、素白、以帆、雨聽、素全、夫川(里川長男)、松雨、桂琴閣、市仙(永富草花園)、有郷(福川無何庵)、梅客、其清(長屋椿々園)、孤舟(竹本松下亭)、花洲(春日月漂齋)、萩川、里代女、以三(宇多田玉字園)、梅呂、歌月、霞調、梅豊、有川(里川次男)、柳枝、君溪、霞標(五吉赤城亭)、渡川、至有(長性園)、白松(松岡雪光園)、視曉、春芽、梅宇、其遊、此朝、花々、里永、其翠。

天保十二年頃 東和、不白、可青、芳雨、齊我、以青、里閑、瀧水、紫江、指峯、芙蓉、梧夕、歸白、素鶴。

天保九年 雨調(臨湖亭)、柳雫(南冷舍)、撫琴、里政、齋家(兩山館)、雪庵(心蓮精舍)。  
天保十年 友梅、可水(十川春光園)、岐水、和水、嘉扇(粟屋涼風亭)、知祥、一知、知新。  
天保十一年 柳洪、蘭指、金露、一友、千梅、遣花、酒主、連翁、蓬花、如水、白鳥、湖翠、里砧(釋)、字喬(釋)、友梅、友暇。

天保十三年 里井(藤木養源齋)、彩甫、孤島、大五、碌々(碌々舍)、保柳、猗竹(猗翠亭)、一三、恒古、湖流、奇翠、知則、錦糸、雨梨宇、友啄、(不セイ)睡眠樓、春蝶一卜、南路、如翠、臺仙、其秋、リ朝、貯月、雨琴、巴流、蕉宇、雨夕、智明、蛙聲、味睡、可孝、湘雨、語中、古島。  
弘化三年 湖石。

嘉永五年 撰里、兔園、雨麥、狸穴、除考、其源、凄々、里風、千翠、如風、花梢、白鳥、雅雪、古溪、瓢五、以逸、錦阿、柯亭、柳和、松翠、步月、良雨、可遊、斜虹、湖秋、確坊、溪園、可炊、花奥、嵐夕、執中、菊石、白澤、鼠六、智量、尹哉、四澤、藍水、佳兆、志行(三河)。  
文久二年 幽草、葦生。  
萬延元年 和水、雪山、湖舟、壺公、碧崖、道雄、十街。  
文久三年 紫、我文、其麓、竹外、後山、皇居、清河、山紫、臥園、對鳥、穆、宙々坊。



明治十二年 我文、有鶴、宜哉、可清、里續女、英里（勝部）、氣樂、原川壽滿、石水（石川）、可笑（原田）、花山（中原國輔、淺水（井上）、市朝、其樂（岸）、文車（三江）、得齋 一章、以文（好川）、石田、三州、三戸、百應（伊達改春琴）、鶴白（梅並）、一章、鶴仙、和哉（土原奈古屋忠世）、淡水（飯田）、富水、虹雨（南方）、山笑、嘯花、幽草、

明治九年 視曉、后川（遊心寺）、衛風（川野）、里井、小僊（木原）、修竹（柿並）、梅志女、如仙女、千松女、五精女。

明治十年 桐已（重見）、

明治十一年 香雨（兒玉冬藏）、吳竹、文庵（村田）、

明治十五年 淡哉、靜雨、棟雲、

明治廿三年 同年四月村上與介氏が發刊した「黃鳥集」に萩俳人の雅號が載せてある。最も行き届いた資料であるから、先づそれを記す。

蓬萊仙、門田句馬、甘谷（七十四叟根來親祐）、一杯（七十五叟長信興）、梅村（七十八叟益田源兵衛）、錦水女（河野みね）、龜遊（國重爲房）、玉兔（山下米藏）、月齋（原田武之輔）、一音（三村音五郎）、里曉（木村重孝）、逸雅（後藤小二郎）、龜嶽（田中十造）、花山（中原國輔）、流水（藤山篤實）、松宇（神田三輔）、護石（七十三叟入江試亮）、鶯遊（岡卯兵衛）、夢中（岡条藏）、小春（藤田虎藏）、古洲

（原菊七）、蘆舟（坂井甚三）、赤松（繁澤藤一郎）、藤盛（藤永治郎）、一壺（内村仁兵衛）、有鶴（八十二叟宗像清三郎）、可清（七十叟増山九右衛門）、禾巷、小田東一豊國居翠竹園、台雨（澤村卯之助）、龍花（岡村智秀）、君水（南部宗衛）、左角（兒玉芳太郎）、烏雪（田村智輔）、和樂（小野五右衛門）、布仙（伊佐辰四郎）、一松（林松介）、研月（花田忠太郎）、山河（永安重三郎）、可也（上田伊八）、森々（作間吉之助）、宜哉（有吉幸造）、汲霞（村上與介）、以上黃鳥集記載の分。如水（中村時亮）、淇竹（後に逸雅）草琴（二葉園）、春保、聽秋（有田）。

明治廿一年 テイ雨（布施清介）、春草（春雨、有福精一）、里續女、耕甫、如仙女、子仙、花雪女、如竹、雪女、湖嵐、里井、祥介（土原住後に桂舟）、吞海（妙蓮寺）、柳花女（有鶴妻）、可祝（櫻井衛守）、可竹（兒玉）、玉川、秀里女（安田玉江住）、泉山、可笑。

明治廿四年 美水、枕雲（瓦町宗像）、乾廬、杉芳、麗水養翠、幹城（原）。

明治廿五年 百山、西湖（原田）。

明治廿六年 桂舟（玉地住）。

明治廿八年 壽老（橋本町重枝源藏）、稼谷（山中三吉）、善哉（行本善一郎）、融三（川上勇三）、月友（鶴屋新五郎）成中（桑原条藏）、水畔（末永安三郎）、久樂（桑原勘助）、君水（松原助左衛門）、浩正（弘中幾二郎）、子得（岡崎喜

七）、桂舟（本多智信）、利徳（福井清兵衛）、喜勇（藤井喜作）

明治卅六年 龍華、花友、蕾香、芙蓉、玉堂、雪堂、一路、松韻、芳蹊、成石。

明治三十年 一壺、古竹（橋本町末永）、淇水、一睡、研月、北溟、桂舟（土原住）、草琴。

明治四十年 台雨、田舎（中村）、炭香、華朴、如意。

大正五年 台雨、如水（瀧口吉良）、草琴、芳蹊、木堂、佳山（山本友一郎）、一路、烏雪、松韻、成石、灌水、我仙、玉川、桂舟（土原住）、炭香、宗和、松堂、一茶、円月、一草、仙龍、芳花女、桂月、秀里女、茶山、推堂。

大正十三年 如水、一草、半芳、邑霞、蘆舟、一芳、遠軒、西樂、一聲、椿翠、畦園、秀里女、抱月（椿町野村俊郎）、芳蹊、仙龍、玉翠（山本七左衛門）、一念。

昭和七年 一路、如水、只月、芳蹊、可水、久甫（河添鮎川榮亮）。

同名異人録

同名異人は時折見られるもので、種々珍談の種子となることがある。雅號に至つてはその傾向が更に多く、誤解誤認の因となり、思はぬ失敗を招くことがある。依つて余が氣付たものを参考の爲め、列記することにした。父子が同じ

家號を用ゆるは普通のことであるも是も念の爲め、紛らわしい類似の雅號と共に附記することとした。配列は年代順

一瓢 清水柳庵美濃宗匠、明治廿一年來萩。

一瓢 明治三年の人丸社献額に其名見ゆ。

一草 金毘羅社献額に其名あり、安政頃の人。

一草 明治三十七年多越天満宮献額、大正五年台雨立机歌仙、大正十三年如水の社中に其名を列す。

露秋 姓名不詳、寛政二年及文化七年の句會に其名見ゆ。姓は井上、明治七年歿、享年八十九、嘉永五年金谷天満宮献額に其名見ゆ。

魯堂 中所可乗、妙元寺住職明治廿二年歿。

魯堂 赤松元道、伊豫國あしやの人、萩に短冊あり。

北溟 馬島春海、儒者明治三十八年歿、享年六十六。

北溟 萩の人、明治三十年の句會に其名見ゆ、當時二十四歳以下の弱年。

聽秋 花の本宗匠上田不識庵。

聽秋 姓は有田、明治廿三年頃の人、作間森々の知友。

西山館 完戸君溪、高祿の藩士。

西山館 完戸齋家、君溪嗣子。

利徳 安政四年多越天満宮献額に其名見ゆ。

利徳 福井清兵衛、明治廿八年清和追悼の句あり。

柳琴 南冷舎、天保九年頃萩住の人。



柳平 金谷天満宮園草撰の献額に其名見ゆ大津郡宗頭の人  
 流芳 姓は笠原、來秋の行脚  
 流芳 姓は金子、明治九年頃の萩の雅人。  
 鶴巢 木村寛 書家安政七年歿。  
 鶴巢 三田尻の人、明治三十七年多越天満宮献額に其名見ゆ。

閑月亭 文政頃、兎園。  
 閑月亭 明治初年、木原小僊。  
 可笑 姓は和智、嘉永七年人丸神社献額に其名見ゆ。  
 可笑 姓は原田、明治十二年の句會、明治廿一年我丈追善句會に其名見ゆ。

霞舟 姓は磯村、山口の人。  
 霞舟 萩の人、美濃宗匠子琴と交渉あり。  
 可水 天保頃の人、夫川追善歌仙等に其名見ゆ。  
 可水 昭和七年の句會に其名見ゆ。  
 雨翠 安政四年多越天満宮献額に其名見ゆ。  
 雨翠 明治卅五年金谷天満宮献額に椿西、明治卅七年多起天満宮献額に萩とあり、恐らく同一人ならん。

雨聽 三坂理平、古萩園三世。  
 聽雨 文化頃の人、來萩せる菊舎を歡待す。  
 君水 南部宗衛、明治廿三年度に見ゆ。  
 君水 松原助左衛門、明治廿八年度に見ゆ。  
 觀瀾居 弘正方、國學者三田尻の人、萬延元年歿。

觀瀾亭 姓不詳、桴一と號す、文久頃大井村の人。  
 桂舟 土原三肩書あり、並記の桂舟と同一句會に出席す。  
 桂舟 玉地三肩書にあり、廿八年度の桂舟本多智信は此人と察せらる。  
 桂月 奈古の人、二葉園社中。  
 桂月 松林桂月ならん、大正二年如水主催松陰追懷歌仙に其名見ゆ。  
 娛中坊 菖蒲庵二世。  
 娛中 明治初年に六十一歳になる萩の人、明治十七年頃の句もある。

古萩園 加邊里川、古萩園初世。  
 古萩園 夫川、里川の嫡男、薔薇園とも稱す。  
 古萩園 有川、夫川の弟。  
 耕月庵 美濃再和坊派十四世、花賞。  
 耕月庵 古萩園七世中村時亮。  
 虎山 明治廿五年來萩の行脚、木園庵。  
 虎山 姓名年代不詳、竹亭虎山の短冊あり。  
 其桃 天保十二年吾朝追善句會に其名見ゆ。  
 其桃 大津郡人丸社境内の句碑に初世水姿園二世不老窟の句と並び三世永春庵其桃の句あり。

其桃 西尾三千堂、下關の醫師、昭和六年四月八日歿、享年六十四。  
 虛舟 落合濟三、儒者官吏、明治廿二年歿。

歸舟 姓名不詳、吾朝追善句會に其名見ゆ。  
 玉翠 大津郡の人、明治五年金毘羅社献額に見ゆ。  
 玉翠 山本七左衛門、大正十三年の句會に見ゆ。  
 玉川 作間藤右衛門、菖蒲庵六世。  
 玉川 姓名不詳、明治廿一年我丈追善句會、大正五年の句會にも其名見ゆ。

嘯月舍 竹部宣右衛門、明治廿六年十一月濤聲により追悼句會催さる。  
 嘯月舍 濤聲、勝津兼亮、明治廿八年二月歿。  
 指月 姓は水野、河添に住す。  
 指月 姓は波多野、眞行寺住職、主に詩歌に親しむ。昭和八年五月歿、享年八十二。

松宇 安政四年の多越天満宮献額に其名見ゆ、先大津の人  
 松宇 神田三輔、明治廿三年頃の人。  
 如水 碧江庵如水、文化頃の人。  
 如水 天保十一年頃の人。  
 如水 奈古の人、明治四年人丸神社の献額に其名見ゆ。  
 如水 周防の俳人、明治廿一年三月不識庵聽秋著「月瀨紀行」に其名見ゆ。

如水 古萩園七世、中村耕月庵。  
 如水 聽松庵十三世瀧口洗耳洞。  
 如竹 享和頃の人、豊路の追善句集を刊行す。  
 如竹 文久元年人丸社献額の撰者。

如竹 明治廿一年の句會に其名見ゆ。  
 逍遙園 佐々木俊信、明倫館講師寛政十三年九月歿。  
 逍遙館 姓不詳、荷風と號す、文化頃の人。  
 春曙園 宗像清三郎、有鶴と號す。  
 春曙園 枕雲、宗像勘作、有鶴嗣子。  
 春草 有福精一、春雨とも號す。  
 春草 姓は伯野、美禰郡大田の俳人明治卅三年頃。

秦々園 繁澤舒吹、文化頃の人。  
 秦々園 村田桃葉、豊浦郡田耕村菊舎の縁戚。  
 榛々園 長屋其清、文化頃の人。  
 森々庵 松後、美濃再和坊派六世。  
 森々庵 備前の人、萩に短冊あり。  
 森々 佐間吉之助、明治廿三年頃の人。  
 松堂 姓は中島、藩士書畫を能くす。明治廿一年二月歿、享年八十五。

松堂 姓不詳、大正五年頃臺雨社中の俳人。  
 自然齋 南田舎の印章に自然齋とある。  
 自然齋 雜俳の短冊に自然齋点云ふのがある。  
 自然齋 増山清和、古萩園六世。  
 自然庵 姓不詳、右和と號す、寛政二年頃の人。  
 自然亭 入江護石。

仙里 桃紅舎と稱す、享和元年頃の人。  
 仙里 金花庵と稱す、大照院梅林に句碑がある。



里仙又は里僊 明治三年人丸神社献額に其名見ゆ。  
撰里 嘉永五年頃の人。  
水哉 坪井顔山、文久二年十月廿七日死を賜ふ。  
水哉 波多野指月、眞行寺住職。  
水哉 山口方面の俳人。

### 各宗匠の菩提寺と戒名

本表は宗匠達の菩提寺、雅號と戒名との關係などを示した

安部吉貞 常念寺 眞如院玉譽休嘉信圓居士  
安部直貞 全 天林院松譽一劃利貞居士  
安部信貞 全 乘船院松譽道笑信貞居士  
安部和貞 全 涼雲院照譽信月道圓居士  
安部武貞 全 興運院圓山定月自休居士  
安部行貞 全 龍雲院大譽海印定光居士  
安部惟貞 全 顯諒院興譽大演慈法居士  
有福春草 全 有精院潤譽春草居士  
高島醉茗 大照院 翠茗軒温室良臺居士  
原箇枕 櫻江清正院 聽松庵主箇枕居士  
致一房 全 聽松二世致一大德  
大野雲鯨 光樂寺 釋心海雲鯨居士  
熊谷蘿月 梅藏院 白雲軒松譽蘿月居士  
熊谷豊路 全 慈雲軒仙譽宏道居士  
永安壺公 京都東大谷 四睡庵滴仙壺公居士

片山幽草 楞嚴寺 聽松軒雲山幽草居士  
有吉宜哉 本行寺 六木園宜哉居士  
岡村龍華 弘法寺 大阿闍梨耶志嘉智秀和尚  
澤村臺雨 報恩寺 百華園潤譽臺雨居士  
前田我丈 全 恭譽寬信正道居士  
中村梅處 海潮寺 廣眸院黃翁梅處居士  
板垣視曉 全 慈敬院雪峰視曉居士  
瀧口如水 海潮寺 明木村西來寺 白雲山青山明城居士  
原田只月 西來寺 自他樂院釋只月居士  
三坂雨聽 德隣寺 天真道祐居士  
祖式尹哉 全 養眞軒無爲尹哉居士  
石津吾朝 全 冬後園雪外吾朝居士  
門田蓬萊仙全 蓬島軒鶴翁宗壽居士  
山根素全 西生寺 六花園釋素全居士  
池田芳蹊 款別院墓は西生寺 常惠院釋西豐信士  
増山清和 三千坊 自然齋釋霞井清和居士  
竹重草琴 全 釋清光軒誓靈居士  
奈古屋以忠 妙蓮寺 大原大夏奈翁居士  
桂春保 全 擁流翠巖春保居士  
山本佳兆 俊光寺 大譽鶴翁壽林居士  
品川美水 明安寺 朗月院殿釋清淨美水大居士  
田村烏雪 蓮生寺 淳信院宗榮知照居士  
石光蕾香 光源寺 占春院釋故堂蕾香居士

水野指月 眞行寺 義乘院釋指月居士  
入江護石 明圓寺 釋月軒試亮居士  
田總百山 亨徹寺 公德院殿百山莊イウ居士  
勝津濤聲 泉流寺 三光齋兼亮濤聲居士  
中村如水 平安寺 耕月院時亮如水居士  
竹部嘯月舎全 嘯月淨業善士

### 聽松庵初世原箇枕碑銘

この石碑は安永十年箇枕が歿した日附を以て、門弟達が萩  
櫻江臨江院境内に建てたもので、撰文は同院住職祖養であ  
る。同院は明治十年三月廢寺となつたので、其後現在の所  
（大照院庫裡前の梅林）に移されたものである。禪僧の文章  
で難讀難解の箇所が多いが、やつと次の様に和譯を試みた  
聽松庵主箇枕翁は別稱を鶴軒と云ひ、雲谷庵に居り、等  
仲と稱す。姓は平、氏は原と謂ふ。梶原景季の後にて原  
豊後守直家の裔なり、翁の家世々丹青を業とし、夙に韓  
幹（唐代の馬を描く名手）の譽あり。十三歳にて世を繼ぎ  
たるも、弱冠目を患ひ、福原氏の子を養つて嗣をなす。  
而して翁は致仕し、一意滑稽の歌道に遊ぶ。始め田祖印  
なる者に隨ふ。又吾が大夫桂翁と共に浪華に遊び、中古  
の風を學ぶ。獅子老師が謂ふ所の如く、比毘耶の問を以  
て教へ、比魯論を以て疾言し、述し而して翹言を是とす  
木雁桑繩の憂、寧ろ白ボクを口邊に生ずるも、是を言は

ず。書を濃陽の五竹老人に學馳し冷暖自らこれを知る。  
老人曰く、是れ跳竈の兒なるかと。即ち都下獅子門の熾  
盛は翁に濫始するなり。昔幻住老人佛頂骨舎に入室する  
や、電光過眼のヨウ言ふにたへず、是を舊日の妍を懷ふ  
が如しとなす。翁亦會て開祖衡州老夫、妙玖大拙徹公に  
益を請ふこと數次なり。寶曆中、日の翠崑眞點胸來つて  
永椿の精舎に客居し、大惠果を提唱す。天の書、圓覺經  
に曰く、一切の時に居つて、妄念を諸妄に起さず、心亦  
た息まらずして妄想に住するの境を滅す。了知を無了知に  
加へず、眞實の頌を辨せず。荷葉圓々圓きこと鏡に似、  
菱角尖々雖よりも利なり。風は柳絮を吹い毛毬走り、雨  
は梨花を打つてケフ蝶飛ぶ。此の心境に到り、二亡發し  
て語言三昧を得、忽ち龜言細語第一義に歸するを知る。  
資生産業皆實相に與り違背せざるなり。踊躍を陳ぶるの  
心を以て、則ち眞點するあらば、胸亦た頷く。慶廊の天  
地アイ蔚の萬物、掌中庵摩に由りて、其の然るを勸果す  
是に於て阿耶律の天眼は、豈に當に八百の功德のみなら  
んや。翁曰く、シュツフ璞玉これ高山流水に肖て、これ  
を言ふ可からず。客冬杜疾の室に偶し、臚を撓めて臥せ  
ず。茲に安永辛丑仲春乙寅の夜、初蛙の句ある短歌行終  
り、明日丙卯行年六十又二、敷座して逝く。弟子は有子  
の喪に在り、予に謂うて曰く、觚を翁に操り、石に勸して  
以し、不朽を千歳に流さん。余や不立字家たるを以て辞



すべからず。其人を樂略して之に繋ぐ。銘を以て曰く、如々體豈に又誣るべけんや、觸境同塵區々に非ず。阿那律肉眼需をやめ、毘耶離翁口糊を良くす。道冠儒履誰が家の徒ぞ、禪版几案カ足を愛す。癡々兀々工夫を熟し、語言三昧須叟を得。向春花を吟じ花忽ち敷き、彌月雨せず雨尙ほ欠く。偶々溪藤を山水の模に探り、危壁ザン崑西湖と孰れぞや。全體左右恰も愚の如く、寧ろ毛君に詫す一事の無。香だ一つに過隙白駒に任じ、この翁無地破蒲に移る。

安永十年辛丑春二月二十三日

見臨江 拙庵叟祖養

誌

長藩講官 草安世仁甫

書

### 微涼亭追悼文

加邊里川

追悼

微涼亭のぬし徐東雅彦は生質篤實にして、常に國恩の有がたき事を忘れざるより、天下の一助なりきいへる彼の白馬の確言をも尊み、正風の眞意を信じ、齋家修身の工夫専らなりしが、壽算も不惑に漸く二つばかりあまれる今年衣更着のはじめより中風に類ひせる病に犯され、鍼藥も術を盡さるこいへども、天なるか命なるか、彌生はじめの九日、眠れるが如く終焉ありしこの訃音に驚き、累年莫逆の友を失ひ、ちからなき杖を曳し、海潮蘭若の墳に詣で、椽を捧

げ、水を手向け、合掌して今さら何をいふべきことの葉もなく、たゞ目前の有りのまゝを口すさみ稽首す。

草の露ときえて誠のわかれ霜 古萩叟

### 萩 墳

萩市土原弘法寺境内には、萩墳と稱する珍らしいものが、今より約百五十年前、古萩園社中の人々によつて建てられた翁の記念碑を調べて著はした對石氏の「翁墳記」に左の通り出て居る。本書中の「萩地方の句碑」に、雨聽の書いた萩墳墨直し會式の文と是を併讀すれば、此墳のことは大體知ることが出来る。

翁墳記抜録

長藩萩府寄舟山龍華園の境内に、二間四面に石を敷き、石の韓櫃を埋め、祖翁所持の麈筆一管、露の萩の短冊、江州粟津本廟の土砂、並に獅子門道統代々の萩の旬眞蹟色紙短冊、美濃宗師墳墓その所々の土砂、是を箱に入れ、紫銅版にその旨趣を精細に彫刻し、相添へ韓櫃の中に納め、石蓋を覆ひ、上に高さ一丈餘の石を建て、面に祖翁より美濃代々宗匠の謚名を篆書に鐫し、古萩園里川並に社中自ら土石を運び、造立して列祖の萩墳と敬稱す。

萩墳墨直し會式

寄舟山の境内なる墳墓は文化丁卯の年、先師古萩園主の造

立にして、芭蕉翁より雪炊庵に至る五代の列祖を祀る。其墳墓は蕉翁の「白露を翻さぬ萩のうねり哉」と、獅師の「六月によき隣あり萩の花」に、廬師の「竿鹿もねに來よ萩に一夜庵」に、老師の「よりのかぬ中の見事や萩薄」に、哉師の「萩に花の咲時來るも來たことよ」との五祖高吟の眞蹟を石の韓櫃に納め、紫銅版に其旨趣を彫刻して埋葬し、萩墳と號す。此地に此道の榮を祈る礎なり。今その星霜を算ふるに三十餘年の昔なれば、舊友は名のみ残る計なれども、そが孫子連綿して列祖の徳をあふぎ、先師の風諭をしたひて、至誠惻怛、互に應じ、墨直す會式嚴に行はれける嗚呼造化の本然なるや、嚮に古はぎの叟が手向に植る置れし古萩も、若葉は日々に新たに、其枝葉の繁茂して巴城に萩の糸長く、盡せぬ友にまじはり、聊恩を報んと爾云。

墳の萩も筆結び誘ふ墨直し

常々庵 雨聽 百拜

### 藁々園舒吹の墨直しの句

余は最近東濱崎松浦さだ家で、屏風に張り交せてある繁澤藁々園舒吹の墨直しの句を見せて貰つた。舒吹は萩に來た菊舎を厚遇して居る菖蒲庵系の俳人である。その前書により、余が兼て考へて居た通り、竹奥舎其音は鶴江臺の音聲寺か或はその附近に住んで居たことが略明かになつた。現今島の形をじて居る鶴江臺には鹿が居つたなどは思はれ

四〇

ないが、臺が地續きで、狩獵方法が悠長であつた往時は、鹿が居つたことは歸一坊の句により、又本文中に「鹿も角落ち」の辞があるによつて想像することが出来る。猿が多く居た越ヶ濱の笠山と鶴江臺は共に萩城の鬼門に當るので或は禁獵區であつたのかも知れない。この事その他に余が不氣付であつた事が一つわかつた。それは萩の墨直し會式に云ふものは、皆弘法寺の萩墳で執行されて居たと早合点して居た所、それは誤りで、萩墳での行事は古萩園社中のものに限られて居たのである。この前書により菖蒲庵社中の墨直し會式は、其音の在世時には毎年春、音聲寺で行はれたことを明かに教へられるのである。そうすると臨江院（現在の日照院）には翁を初め美濃派三先達の句碑もある位である、聽松庵社中の墨直し會式は音聲寺と同様に、其處で行はれたと云ふことが當然考へられる。宜哉龍華の兩人が三社の文臺を一人で悉く引受ける時代になつては、或は余の初めの考へ通りであつたかと思はれる。

彌生初の六日鶴江山に雅蕙をひらきかはらず例年の會式を執行せしが卷頭の一章を予に命ぜられ竹奥の宗師にしたがひよみたるに折よく天も晴渡り指築の城樓咫尺にそびえ大悲の高閣目前に尊く經よむ鳥に鹿も角おち柳は緑の色まさり櫻は花の香を送る見おろす滄海穩かに濤聲もきこえず歩み運ぶ社友の數輩賑はしくつどひ集り各餘風の德輝を仰ぎ具拜稽首し奉るまで



世に朽ぬ恩の光りや墨直し

舒吹

視曉に雅號を贈るの辭 等流園後吹

長陽萩藩板垣氏のぬし正風の俳諧に志を寄せられて、永く修行あり度のよしにて、予に雅名を乞はるゝよし、鶯聲舎の主人叫かるゝに、いなみ難く、四季園視曉と號るは、行餘もある時は絃唄の華美に流れず、寂し神に入る俳諧もてあそびて、五倫五常に聊も違はず、老後の樂するには、勤をよくして後の事なれば、日々に夙に起き、夜半に寝んごするの際には、俳諧の道の修行を怠る事なかれこ、此一章を贈り侍る。

樂しみは月雪花の朝ぼらけ

天保二辛卯年如月良辰 東都

等流園老人

文臺開

三坂雨聽

抑々當門に傳來せる俳諧の三具足は往昔安永のはじめ、先師古萩園長途の海山を態々越て、濃陽の五竹庵に赴き、老師の膝下に螢雪の日を累ね、道に虚實の深意を探り、その即喙の應じてや、文臺三類は老師自筆を下し、五條式規の裏書及祖翁の讚は哉師に指揮して染させ、讓與ありける西國無二の珍器なりとぞ。園師歸庵の後、普く社友を誘引へば、其徳を慕ふ人々算ふるに暇あらず、繁茂の功成り名遂て後、胡枝庵へ傳來せしが、庵主不幸にして登仙と化し、

其遺念永からずゆへ、滅後門葉の衆議黙止難くて吾が如ヒツ園に文臺を預かりしが、素より薄劣覺束なく、社友の推敲に力を合せ、烏兔押換して終に八々の老屈に至り、耳目の官も衰へ、諸邦文因の返辭も懶惰し、持脚公務の任を荷ひ、添旅行の帶杖多く、心身安からざるゆえ、過る亥の春京攝行の間は、素全夫川の兩雅にしばらく此器を預けしが月次の會庭嚴に調ひぬ。されや歸京の後も雅俗彌増に蝸集しけるより、去年の冬其よしを老練の友に呷きひたぶる謙讓の固辭を具しき。年立歸る春のむつまじ月を幸に、傳來の文臺を六花園素全の主に出たく授與し、夫川有郷の兩雅を此門の補佐と定む。さは園師の餘光を挑け庵主の夙志を次ぎ、梅の薫りを吹傳へ、松の緑の永く、千代に八千代にさざれ石なる二見の嵩の注連飾りにエウをそへ、道の不易を末弘々祈らんこ、今日の儀式に祝し壽く。

はつ日影福壽二見の松と梅

六十四叟 如ヒツ園雨聽

雨聽手懷紙

三坂雨聽の手懷紙は同師の晩年即ち天保九年から十三年までの俳諧に關する出來事を手録した六冊の手帳であり、當時の事情を窺ふ好資料であるから、少し許りその内容を抄録する。第一冊は天保九年から十二年に至るまでの身邊雜錄的のものであり、美濃の宗匠、友左坊や爰花坊の事、長

門萩府連二十二名の春興の句、吾朝追悼句會のこゝ、其他次のものなどがある。

○予が草園は田中といふ所にありて千町の田甫を東南にうけいつも眺望に事足れば

田も鶴も我もの顔の岡見かな 如ヒツ園

○名に負ふ長門の藩中なる諸君子斯余の風雅に遊びて春帖を催し給ひける事の喜ばしく、行末長く道の興隆を祈りあふぎて

所柄や萩の芽出しも冬ながら 爰花坊

○八江萩なる如ヒツ園の社友は月に日に倍繁榮して、殊に増進専らなれば、誠に末頼母しき一連なるにぞ、年尾の文のはしに夫むねを(天保十一年)

八江にむれる友幾許ぞ千鳥こも 八十三友左坊

第二冊は天保九年正月より十二月までの月例會記事である  
○良夜古萩園にて興行。此清光の雅庭は古萩園の嗣君夫川有川の兩雅渡給ひて、諸君の誘引ひに老杖を鳴らす。抑々此庭は予が壯かりし時、道に膝下の咳唾を受し師園にして、昔の仕の忍しく目に先師の俤も残りて、其恩澤の余光爰に輝き、賑しく談笑に遊ぶこゝは最勝ならし。たこひ玉樓の金殿に月見するも、物の數ならぬ心地して

月今宵宿るゆかりも萩の園 雨調

第三冊は十年一月より十二月迄の月例會記事、第四冊は十一年一月より十一月までのもの、第五冊は十二年一月より

十一月までのもので、共に會場、引受社員の名の他、上方の欄外に引受社員の名を書き入れてある。

○十二年正月廿二日園師大士忌追善興行 竹に吹風もむかしの春を今 夫川

届く誠のめぐる恩の日 雨聽

○十二年十一月八日。胡枝園十三回忌追善會玉宇園にて興行。人の亡き跡は光陰猶々箭の如しと、胡枝園靈主不定义を辭してより、今年は遠芳忌にあたるに聞ゆ。此靈や我が師古萩園下の雅兄にして、若かりし時より、文臺授與の大任を荷ひ、道に己を空ふして、月雪花の旦夕を嫌はず、ひろく衆を容るゝより、其澤に浴する君子、今尚顯然たり。中にも玉宇園の主、信厚く此報恩會の催主となり、其世の誰かれを催促して、雅庭を營るゝよし、懇に告給ふ物から尊靈の在世には、予も推誠の決を蒙りし雅兄なればと、聊冬枯の言の葉をつどり、靈前に呈す

さしかいふ。 雨聽

手向の連に鳥も笹啼 雨聽

以三

雨聽終焉事蹟

山根素全

抑我師如ヒツ園雨聽老人、其はじめ古萩園師の門に入て、凡そ二十年の修行地に鍛練を懲し、先師胡枝庵主と兩翼の風弟にして、修力金剛の信に感じ、俳諧の魂を傳へ置れし



が、萩師深く心に思ふ事ありとて、文化辛未の春葦兮師坊へ文藝讓與ありしに、庵主不幸にして文政己丑の秋、世を早ふ登仙し給ひ、其世に門葉の勤めと云ひ、黙止難き遺命を肯ひ、如ヒツ國に文臺を傳來し、無味に有味の淋し味も有味に無味のおかしさも、道に一貫の道理体に黠き、不易流行に其日其時の風雅を尋ね、自他の交りに今はた十有五年の星霜を経ぬ。されば常々庵の名も宜しからんか、三たび結びて三たび住捨て給ひしも、常に常なき世にたごへ、應無所住の変を悟り、之より憎愛の限に漂ひ、萩が江のほとりに假居して、そこに雅俗の汚心を瀧ぎ、天保癸巳の秋ならん、晋水慶安橋の西に僅かなる閑室をしつらひ、彼維摩の方丈に倣ひなし、號を方五齋と呼び、爰にも幾許の門葉を集め、推敲に一字の信を盡し、猶さら去年の冬は、今の江南の地を卜し、創造の廬舎に起居を安んじ、老後一日暮しの本懐を遂げ、いよ／＼道心堅固におはしぬるが、是より先に十有二たび、自國他邦經廻るも、ある時は滑稽虚實を探り、或日は造化の姿情に遊び、道に正風の要旨を諭し、先師の遺命に粉骨を厭はず、千辛萬苦に精神を勞し給ひぬるにや、こゝし如月末の頃より老心や／＼づなふれ、手洗ひ口瀧ぐ朝暮の勤めもいさ力なく、例ならぬ有様になり、驚き所藥の供給、かはり／＼枕に添ひて、心の程はいたはりかしづき、神にも祈り佛に願ひ、他事なく加養を勤めけるに、往の月末の比より、いや増の衰へにて、玉の緒

維時天保十四癸卯初夏廿六日

六花園 素全 謹誌

### 三友亭古溪の鞞琴亭追悼句

こゝに掲げる古溪の追悼句は熊毛郡三丘村に隱退して居たヒ琴亭に對するもので、別に異色のあるものではないが、このやうな關係の人が他にもあることを示すものである。即ち毛利支藩の人で其職責上相當永く萩に居り、俳諧を嗜んだ人の居たことが知られる。

三丘ヒ琴亭老雅は治城に在勤の折々道に莫逆の因み淺からざりしも郷里に隱逸を樂まるゝの後はしばらく拜謁もなさず打過ぎしが此秋かへらぬ泉界へ旅立給ふこの文信に驚き悲しみ彼流水高山の例も想像せしめては追悼の野章を送りて雅靈を慰むるなり

匂々頓首遙拜

琴絶えて憂し色かへぬ松の友 三友亭 古溪

### 京都東山芭蕉堂繼承の辭 永安壺公

左に採録した一文は壺公が京都東山にある芭蕉堂を繼承した時、知友に配布したもので、半紙一枚に活刷してある。これに依つて當時の状況が知られる他、次のこともわかる。即ちある成書に芭蕉堂の世代は、闌更、蒼虬、千崖、朝陽、九起、公成、壺公、南徳、楓城、梅雄、楓

の絶えなるとばかり、頼み少なき様なれば、あたりに隨仕の人々も、深き淵に臨み薄氷を踏む心地なるぞ、斯まで疲れ惱みおはしけれども、心神聊も平生に違ふ事なかりしが卯月七日の夜に到れば、さりとも覺束なき詞をかはそのみ今は甲斐なく夢幻の此世をも見果ぬるやと思ふばかり、物として病床にあはれを催さざるはなし。八聲の鶏、晨朝の鐘いづれか生者必滅の理りならざらん。斯て枕近く侍座しぬる其嗣霞調子に筆を取らせて

葉さくらや明がたの雲靜なり

此一章を生涯の名殘とし、六十六の天年に任せ、睡れるを期として、終に黄泉の客はなり給ひぬ。借しも其事の聞えあると等しく、社中の誰彼あはやと驚き集りしが、歎きて返らぬ歎なれば、各々無二の信を運び、其明日夜は徳隣精舎の境内に棺を埋葬し、一堆青塚のあるじこはなし侍りき。所は江南の靈地にして近き流れは其儘功徳池の水を湛え、叩く水鶏も、灯す螢も皆此墳前を守るに似て、すべては觀念の便りならず云ふものなし。されば荷恩の兄弟に噂き、今日や常々の舊庵に法會の式を營むにぞ、遺詠の葉櫻に左右なく雅魂も止り給へば、其結縁をせめてもの手向種に、是を追福の巻頭に定め、因みに終焉の事實を顯はし、爰に師恩の一隅を擧ぐれば、同じ流れに遊ばん人々は、一理萬通の時に逢ひ、永く此尊靈の徳行を慕はざらんや、仰がざらんや。

崖、露翠、藍水と傳承したやうに、記載せられてあるがこの文に據つて、千崖の歿後に再び蒼虬が繼承し、公成の歿後には闌更を初世とする金澤系の八代となつた内海良大が暫時繼承して居たと云ふこと。

京都府東山芭蕉堂は闌更居士の創建にて、跡を蒼虬にゆづる。崖早く没し、虬再住して又朝陽にゆづる。陽没して九起繼ぎ、起退去して公成入庵す。成没後良大住せしが、去年府廳に召れ、退去の後空庵となりしを府下の老輩維持して、集會所と定められしが、此春愚老が上京より、暫く寄留して一名跡の頽廢せざらんやに有しが、素より弊習の陋質、其任にあたらざれども、只四方の高風子に助成を乞て、國々の風調を伺ひ、西に東に是を傳信すべき集冊を綴り、一時々々の俳風を通じて、廣く風交を起し、兄弟の思ひをなさしめ、不易の俳諧に維新の風味もあらば、一しほ俗談教諭のはしにも早く、古人の深意も無益に屬せず蕉堂修理の發願にも叶ひ、此道の表おこすべき時にも成ぬべきかき、其故よしを告て、月々古今の高吟を送り給ひ、老生が微意を憐み給はん事を希望す。只言行の一致に及ぶミ、あらざるとは、諸君子の助意の厚薄も、文音の多少にあるのみ。

明治九年二月 京都東山芭蕉堂におゐる

長門人 壺公 誌



幽草旅日記

片山幽草の旅日記で余が見得たものは、左の通り大小四回の旅行を誌した六冊である。第一冊は文久二年十月二日福井村大井村へ行つた後、明木より山口を經、三田尻富海まで行き、十二月二十五日過ぎ歸萩した記事を収めてある。第二冊は文久三年二月六日萩發、福井明木山口を經、富海から船で藩州室津まで行き、宇治、嵯峨など歴遊、美濃耕月庵宗師の許に落ち付くまでを記して居る。第三冊は宗師の勧めに従ひ、奥の細道の跡を辿らんと、美濃を出發せんこした六月九日より、善光寺日光象方松島などを經、北越加賀越前より美濃に歸着するまでの記事を収めてある。第四冊は十月廿七日の書出して、文久四年二月廿九日玉江に歸庵するまで、美濃より歸路のことを記してある。第五冊は慶應四年五月萩を立ち、京都丹波江州を經て東京に行つた時のことを記してある。第六冊は明治十年九月玉江坂を越へ、下關を經て暫時九州に行き、それより引返し、京都江州を經、十月廿五日東京着、越年の上、五月十八日箱根に登り、京都などに立寄り、歸萩したる時のことを記してある。幽草が諸所の俳人を往訪した模様など、一々誌し切れないので、處々の感吟や自他の前書が参考になるものを少しく抜録することにした。最初の一項は文久三年四月廿七日美濃に着いた時のものである。

○風雅に心のうきを恥ぢて、もよほきの國養老の麓なる大宗師の面影を慕ひ奉らんと、今年きさらぎ初めの比より蓬生の宿を立ちて、一盞の笠を春風に吹せ、そこ爰の花に漂ひ、轉る鳥にぞ杖をさしめ、や、水月の七日、おそらくも耕月庵の門を叩き九拜して

道の間てらしておしき螢哉 幽草  
よう尋てぞ草茂る宿 耕月庵

○長門の國なる幽草士は千里獨歩の鐵石心より、波濤の海上を事もせず、皁月のはじめ我草庵に來られける折から、彼の國の雲鯨老人も奥の細道をたどり、三越路に漂流ありし所縁の有ければ、是より筇をむけられかすと進めけるに、幽士其志なきにしもあらずに速に肯ひ、けふなん勇ましくも首途しむるを郊外に送りて

分入て知れ陸奥に薰る風 耕月庵

○七月十八日大沼へ八里山道。大沼山大行院は百廿石の御朱印地なり、浮島は山の頂上にある沼なり、島の數日本六十六ヶ國の名残らずあり、沼の内浮き歩るくこ誠に奇妙不思議なり。

浮島の動くや秋の風なき日

大沼山別當大行院に申すは大江の廣元公嫡孫(寒川江出羽守)新廣公續きの家なり、紋所に三つ星廣元公より傳はり、君萬歳友成云ふ太刀寶物あり。寒川江の城十八代にして落城の後此院に納る。咄を聞て袂を絞るべき地

なり。

○八月廿六日、味方に行き、常教寺に詣て、雨江の墓參をなす。それより阿部の文桃士を尋ねて、雨江の病中死後まで残らず咄しを聞く。墓所に

國へ送る露あらは我が笠の上

雨江は萩の人であるらしい。その句が梅室門下として、俳諧集にも載つて居る所を見るに、京阪地方でも、少しは知られた俳人のやうだ。「年の市梅賣る店の靜なり」の句が萩に残つて居る。

○ことし皁月水無月の比耕月庵に相蚊屋いたせしより、美濃の國そこ爰いさなはれて、獅子庵に汗をこぼせしも、鶴舟の眺めの面白きより、我松島に行くを餞別の句などいたされて、歸杖を待つなき、いこ深切に申されし事忘れがたくて、奥羽北越の果なき道に夏秋を重ね、漸く長月末の二日南越三國の地にいたり、床しき松下臺を便りて

幽草  
先うきはなき色かへぬ松の下 幽草  
百日指を折し長月 松下臺 故井

○十月朔日、あさむつの橋玉江の蘆は福井より鯖江の間、あそふ津といふ宿にあり、今は玉江の蘆は形もなし。

○十月十三日神戸へ行き、それより麥庵に泊る。  
月雪の咄聞ばや千まつ島 一耕  
長き旅路も忘る埋火 幽草

○十一月十一日、幽草雅君奥羽三越路も恙なく經過し、往返予の弊庵に留杖ありけるこゝに、終に百日になりぬ、道に龍門の功ありて、此度家嚴耕月庵より文臺を授かり、其所社頭の任を受らる、は、實にも百世の譽こやいはんけふや歸國の告に拙き賀章を綴り、且名殘惜くも郊外に見送り、愈々風雅の榮えむ事を祝しはんべる。

嗚呼勇まし冬も錦を國の曠 竹圃  
道の冥加に余る月雪 幽草

日記中の數多き句の内より、更に余が好めるものを左の通り採録する。

陽炎や今荷をこりし牛の脊中  
鶯の糞流れ出る筧かな  
さ、浪に初日の影や浮御堂  
春風や近江の道のはかどらず  
凧切れて地段太踏むや男の子  
稻妻や船にきこゆる摩耶の鐘  
瀧へ日の横にさし込む紅葉哉  
み車の雲に轟く櫻かな  
木缺の音や秋立つ寺の庭  
神の馬窓に首出す寒さかな  
雀追ふ鷹の羽風や枯柳  
師の傍に心の残る火鉢哉  
春の山鳥籠提げてのぼりけり



### 古萩園文臺開

有吉宜哉

八重秋の郷に傳え來りし古萩園の文臺は、そのむかし先師里川ぬ濃陽五竹庵に赴き、膝下に螢雪の功を重ね、文臺三類は老師自筆を下し、五條式規の裏書は以哉師坊に指揮して染させ、安永二年巳の春、古萩園師に譲與ありたる無二の珍器なりしを、胡枝園、如ヒツ園、六花園主こいや繼々に連綿し、四世六花園師年久しく持行かれしが、公命に依り、播州兵庫の陣營に官務たりし折から、素全師官舎に物故ありしより、三友亭のぬしは同派の事なれば、社中の駈引、會式の雅遊をも依頼し過ぬるうち、六花園師の長男曉花園主春和雅兄へ、三友亭傳來の竹奥含菖蒲庵の文臺をも合併して、譲與すべしとの遺言もありしに、春和ぬしもまた官途の際なきより、予に預り申すべきよし、屢々内諭年あれども、さは短才過當の任なれば、たび／＼堅く辭し侍りしに、こたび春和、可清の兩雅美濃に赴き、示談の末道の爲なれば、説諭の懇命頻りなれば、竟に止むを得ざるに、猶濃陽宗家よりも譲與の命に會頭の大任を蒙りしかば、最早謝絶の言葉なく、先は芽出たふ今日の主となりて風遊を開くも、全く諸大雅の補助を仰ぐ事、杖に柱に頼み参らせ、巴城の此地に古萩の連枝永く繁茂せん事を、偏に／＼禱り申し、日ならずして同社連の英敏に譲らんことを誓ひ、爰に前顯の次第を述べ、將た自祝に加えて拙き一

章をものし、諸雅君の祝章賀詞の懇篤に謝し申すことしかり。

まづ開く榮えや千草の花庭 六木園 宜哉

### 扶桑園立机祝詞

有吉宜哉

抑此長門八萩の郷の舊藩士作間藤右衛門ぬしは石鏡亭玉川と言ひし宗匠にて、若き頃より俳諧に志し厚く、藩主東都の屋形に官務の折から、等流園倭吹宗匠の庵に通ひ、俳道を勉強し、竟に宗匠たるべき免し文を受け、嘉永の頃ならん白齋坊裏書の文臺を授與ありしより、しばらく社友を誘導して、廣く風交の折から、安政の末、世を早ふせられしが、社中に譲るべきものなきより、臨終に到り、おなじ等流園の流れたりし因みあればとて、板垣氏四季園視曉老雅に頼み置といへらく、其社中または他門といふも、宗匠の眼鏡をもつて譲り傳へ給はれかしこ、病中餘儀なき遺言に隨ひ、長らく四季園に預り置くも、また誰あつて傳へ譲るべきほどのものなく、休め置かれしが、視曉宗匠も七十四齡の高壽にして、病床に打臥給ふにぞ、一日六木園宜哉が四季園の病を訪ひまうしたるを、さゝやきて玉川士の文臺先づ預り居て、追つて授與すべき風士を見立て、これが主となし、石鏡亭の遺志を全からしめ給はれかしと、割なき頼みに、危篤の病中まづは安賭なさしめんと、ことうけして年久しく預り居たりしに、此たび扶桑園龍花御坊

の英才を見込み、絶えたるを受繼給へかしと、兩宗匠の遺言を語り、頼みまうせしも、再三辭退ありしを、八霞井清和仙ぬしと俱に事わけて、平に勧誘數度に及びて、漸く此秋承諾となりしかば、傳來の文臺其他の物々を添へ、はた六木園よりも文臺に附與すべき品々を別記し俱に譲り傳へて、いよ／＼立机の披露に及ばれけるにぞ、まづは行末永く繁茂の松影廣くと、色かへぬ扶桑園の千秋を諷ふて、いよ／＼／＼社中の風士、桑士のごこく、月に年に殖へ増さん事を禱り、はた開庭の今日を祝ひ壽ぎ侍りて。

六木園主人

改めて耀く色や松と月

### 六木園俳諧手懷紙

本帳は有吉宜哉が晩年に書いた俳諧に關する手控であつて明治廿一年一月より明治廿六年十二月に至るまでのものが四冊ある。是により毎月の例會の様、意義ある臨時會の様、行脚接待の状況などが判明するので、雨聽手懷紙と同様、よ／＼参考資料である。第一冊は明治廿一年度のもので、例會以外のものを擧ぐれば、素全の妻花雪女の歸郷を機に、三月廿六日寄船山で催した素全の句塚供養連歌會の記事、六月十七日自然亭で催した祖翁尊像の開眼供養會の記事、七月廿七日四季園で催された視曉居士七廻忌取越法會の記事、十一月廿六日大月庵で催された我文居士一廻忌追善會の記事。其他行脚として來萩した里風、樸實、香衣

可嘯、其一、春阿、鶯期のこゝが記されてある。第二冊は明治廿二年二月より廿三年十一月までのもので、月例會以外の記事としては、三月一日寶塔山で催された三輪湖嵐の追善會。憲法發布に付き、長壽祝御惠金八十歳以上五十歳九十歳以上一圓、百歳以上一圓五十錢下賜さる、こゝ、なり、蓬萊堂宗匠八十八歳にてこの恩惠を受けられたれば、三月廿九日蓬萊堂で催された臨時祝賀連歌會。四月三日光月庵で催された濤聲初孫の雛節句會。四月廿四日唐樋町朝日樓で催された春阿の古稀祝賀會。六月十九日岡松亭で催された壺公居士十三回忌追善會。十月廿四日春曙樓で催された有鶴妻故柳花女の追善會。

長き夜や行燈に残る針の跡

柳花

其他行脚として來萩せる其一、眞海、流芳のことが記されてある、二十三年こなつては、三月廿日妙蓮寺で催された吞海師の追善會。

辭世 眼覺し、花に劣らぬこの落葉 吞海

五月四日養源齋で催された里井妻の追善會。得齋古稀年賀百韻。十一月二十二日西生寺で催された春和叙位祝賀會。其他行脚として來萩中の其一、禹兆のことが記されてある。第三冊は明治廿四年度のもので、例會以外の記事としては、一月廿八日春曙園で催された有鶴居士の追善會。二月廿五日岡松樓で催された得齋居士の追善會。三月十日八霞井園で催された春和居士追福會。九月八日翠竹園で催



された禾巻の母、妙龍禪尼の追福會。

遺吟 結構な夢のあしたや蓮の花

妙龍尼

十月六日福井村禪昌院で催された其松居士の追善會。

辞世 きえて行く心も涼し夏氷

其松

十月三十一日春曙園で催された有鶴居士小祥忌柳花大姉大祥忌追福會。十二月十八日自然亭で催された護石居士追善會其他行脚として來萩した塙芹、以兆のこゝろなどが記されてある。第四冊は明治廿六年度のもので、例會以外の記事としては、五月十八日三見村阿部亭で催された深耕亭有秋の追善會。

辞世 永き世も只夢ならん曉の春

深耕亭

六月十一日小橋筋藤木氏舊庵で催された里井居士追善會。八月十五日三光齋で催された月見會。十月十二日六木園で催された祖翁二百年忌追善會。十一月廿八日三光庵で催された竹部嘯月舎の遺吟脇起俳諧連歌會、其他行脚として來萩した虎山のことなきが記してある。以上四冊の手懐紙の他、表紙に四ツの海と題し、明治十三年より十七年までの書入あるもの。極處萩帶杖中の記事を纏めたもの。表紙に發句書取と題し、明治廿四年一月より廿五年十二月までに書きとめた俳諧覺書等がある。然し尙明治廿五年度の月例会記事などを記した手懐紙其他の俳諧控へが存在した筈であるが、今散佚して見られないのは遺憾である。

### 八江社連歌控

扶桑園龍華が萬蒲庵を繼承し、次で聽松庵を繼承した頃即ち明治廿七、八年頃より、龍華を中心とした俳諧連歌の會を便宜上八江社と名付けたと思はれる。本連歌控は十二冊あり、夫々別綴りになつて居る。その内容は第一冊が明治廿八年十月十二日に催された翁忌脇起俳諧の連歌で、續いて廿九、三十、三十五、三十六、三十七、三十八、四十、四十一、四十四、大正二年の各年略同期に催された同題の連歌が主である。唯一つ四十年二月十九日嘯月舎で催された濤聲居士十三回忌の追善連歌が異つて居る。初めから十冊までは表紙に八江社とあるが、終りの二冊だけ表紙に聽松庵と書き入れてある。而して初めの冊には會合者が二十八名もあるが、終はりの方は僅か四、五名に減じ、漸々淋しくなつて行つたことがわかる。尙一つ少しく参考になるのは、明治三十年の分と三十六年の分の探題句とが年齢順に並べてあることである。其例を三十年のにさるゝ次の通りである。一壺、古竹、一槎、龍華、洪水、一睡、研月、花友、松韻、芳蹊(廿四歳)、北溟。

### 萩俳諧師の序文跋文録

人物或は紀行などを表顯せんが爲めに、書き残した書物の序文跋文はその主人公の性格業績を稱揚するに同時に、執筆者自身の才學立場などを能く現はして居るものである。因つて其内容が單に、資料價值があると云ふ許りでなく、

種々な意味をもたらしものである。余は往時の俳諧環境をのぞく遠眼鏡として、左の通りいくつかのものを拾ひあげた。讀者は夫々欲する方面に意味を文取つて下さらば幸ひである。

### 以忠以成長攝兩吟連歌序文

山根南溟

永言の以て已む可らざるは、夫れ人その情を達するが爲めか。此邦連歌なるものあり、乃ち三十一の付に原づき、分つて兩句をなす、是亦國風なり。奈能二君は同臭味の者なり。而して能君は處を攝の藩邸に守り、千里肩をならべ一詞を裁してこれを貽し、奈君之にカウす。桃李酬投し、積もつて百句をなす。因つて名づけて長攝兩吟とす。此は能君の唱を先きなす、蓋し懷に慨然たる所あり、而して其情をして諸を連ねしめんと欲す、それ公知のものか。山川隆邈、情交疎ならず、亦唯だ永く之が頼を望むなり。余二君の間に遊び、而して會々この集を見る。然りと雖も吾未だ之を學ばざるなり。則ち豈にその造詣する所如何を論ずるを致さんや。唯だ永言の以て已む可らざるを言ひて以て序となし、其徴に應ずとしか云ふ。

安永七年戊戌之秋

山 泰徳 撰

### 以忠以成兩吟序

能美以成

### 連歌兩吟序

おもてはいつくしみに似て、宵ぬ言の葉のうらめしき世の中のならひも、さすが心に任せねば、こにかくに思ひわづらひしける。池の蓮の露を見て、げに言の葉の上ばかりはいさ清けれど、濁りし水の心のそこは、うさましく思ひしを、其まゝの句なれば、さしたるふしもなけれき、言の葉のはの字ばかりを専らに綴りたる心を、知人に見せまほしく思ひて、奈古屋翁の許に贈りけるに、翁付句有て、又翁の發句にわれもつけて、員満しまゝに、長攝兩吟と命けぬ翁は聖の文に深く達し、唐歌にも其名聞えしのみならず、大和言の葉の道の奥まで分け入て、心の色秀でし句に、拙き言を連ね交へしはかたはらいたき心地し侍れど、素より人に見すべきに非ず、唯翁と我と懷ひを述るばかりなれば心やすきことにこそ。

桃李亭

梨郷

### 以忠以成兩吟序

奈古屋以忠

### 兩吟序

この連歌二百韻は能美氏と某が兩吟なり。某齡古も稀なりといひしに、猶五とせ許りも踰て、年相しかざるこそ、二十年に餘りしかど、まことに年を忘るゝ交りを縮びて、世を同じうする人、貴きも賤きも、老たるも弱きも、限りなく多き中に、我を知れるは此生唯一人と覺えて、親み深く



年月を送りけるに、津の國浪華にありける藩邸の留守に、擇ばれて旅立しかば、我老を極めし身の再會もはかられず。思ひの外に、今茲安永六つのみし卯月の頃、公事により家に歸りぬ。聞て、日を送らず訪ひて、一夜語り明し、其後も屢々往來する次手、蓮の發句を書付て贈られしかば、とりあへず二三を付しかへし、それより相與に思ひ續けて、文月半に至らず百の數を足しはべりぬ。我も亦月の發句をかり初に綴りて、取やりしけるに、句數いまだ百の半にも至らぬに、能美氏復浪華の役に祇む事に成て、起程の期も文月廿日と定まりしかば、偶々思ひたつ念の、遂げ止なんはいさ口惜きわざなり、住所こそ千里をも隔つれ、天津雁の便りにつけて、心の通ふこゝは難からじと、言を結びし甲斐ありて、是も亦百の數に足りはべりぬ。然るに此生は才學を兼て、此二卷にも一ふしある句、彼是多き中に、某は遣つかれて、再び思ふこゝもかなはず、唯筆に任せて、かき集めたる冬木の落葉、目にこぼる色しなけれど、子や孫に傳へて、祖父はかゝる事ありしなど云ひあへるは、家に遺る名の朽ぬ端とも成りなんと、始め終りをこゝに、記しはべるものならし。

安永ひのこの酒

漏卮堂主人 大原

附記 初めの序文を書いた山根泰徳は華陽の嫡男である。秀才で後には俳諧もやつては居るが、安永七年頃はまだ是には手を染めて居ない様だ。本書の由來は序文により

をもふくる事が、せめては本意を言傳ふも佗べし。殊に猶も風雅の身の慈愛を願ひ侍らん。實にや當地も此道の冥慮に捨られざるかと悦びノて。

畑打て心楽しい種待ん

聽松庵 簡枕

附記 「枝折」は爾松と蘆習の兩人が編した筆寫の紀行文集である。爾松姓は寺戸、仙崎浦の人、號を不易亭と云ひ、蘆習は號を霞江舎と云ひ、三隅村の人と思はれるふしがある。又兩人とも日蓮宗の寺院の住職らしい。それは京都の日蓮宗の本山に參詣する序に、道々の風士を尋ね、美濃へも修業に行く云ふことが書かれてあるからである。この二人は兼て簡枕の教を受けて居り、爾松が兄弟子で、此度蘆習を誘ふて出ることになつたのである。

九華記

### 東武紀行「旅之花」序文

竹奥舎 其音

送別

信は修力のみなもににして、其信全きは蕉雨園の主人なりき。されば萩に正門のはじめなりし唐波庵の流をも務めて、人和の風雅に遊ばるゝは、普く人の知れるところにして、近きほどは時宜嚴重の世上をはなれ、隱樂に性を養はるゝにぞ、ひみ度は巖旅に遊慰して、薦一枚の寂に佗寐をもそこに志願は年ありながら、遠く遊ばずの孝情に、その沙汰なかりしは、わりなき今日の道理躰とやいはん。しかる

明かであるが、この文を照應する爲め、第一卷第二卷の初めの二句文けを書き添へる。 九華生

第一卷 安永六年六月廿日發端七月十二日全備

言の葉の濁りなき世の蓮かな

以成

水の心の涼みとる宿

以忠

第二卷 七月二日發端

千里をもわけぬぞ心月の友

以忠

行に隨ひ雁の鳴く聲

以成

### 「枝折」序文

原簡枕

餞別

此度濃の歸童老師へ參して相見を願はんこゝ、正風の本来頻りに、春の草の萌え出るやうに進み合せて、既に鞋懸の出立の勇ましき松習の兩風士、庵の草扉を押して、其志を深切に聞せられぬ。そは若き其心向にも、風雅の信の並々ならぬ發憤を感じ入て、誠や予も多年此事のみ、朝夕に願ひながら、因縁拙なきにや、其時を得がたく、過し年は老師の安居の比をうかゞひ侍るに、夏の末秋の初ごろは入室も叶ふべきやうに、いさ念ごろに聞せ給へるより、いざさらばますほの笠取あへぬ心すゝみにも、其比と同行に頼みたる人の聊かの障ありて、誠海月の海老の眼をはなれたる心地に、是非なく止みて、うつら／＼無念の歳くれとなり、今は妄語の罪も重ぬるやうに恨み暮す折から、かゝる便り

にことし衣更着のはじめ、もの詣でのついで濃陽の師地はもとより、武陵に至りて、宗師にもまみえ侍らんこゝ、いさましき旅姿を吹聴あれば、予は東武の官務にゆきゝを重ね海山かけて三百里も、鶯のとなり歩き、ひたすらに進めしが、此節漸／＼惑はずの齡ひを越えながら、常に虚弱の初旅なれば、こも／＼道祖の神を祈り、廊外まで老の杖をひきて見送るは、誠にめでたき首途さいふべし。

戻り風の立つまで遊べ旅の花

寛政十三酉歲仲春

竹奥舎 其音

附記 棋壁姓は宗岡、藩士である。父花苗も風雅の士で一字庵菊舎は萩に來た時、父子の世話になつて居る。

九華誌

### 「雪のねぐら」序文

亞壁坊

始めあれば終りある事たれかしらざらんや。爰に朗秋亭の主じ豊路雅子は、素より満倉の家に生れ、何ひこつ心に應はざる事なき歡樂を極め、身には錦繡をまこひながら、薦一枚の寂をわすれざる風雅に心をこらし、老後をたのしまんと、他郊の俳友をかたらひ、交りをむすび、又ある時はしらぬ火の筑紫、難波花洛に遊歴し、去年霜降月中の九日旅窓において終に身まかり申されき。嗚呼情ない哉。此人假令千歳の齡ありとも、世を疏み疎んぜらるゝ事あらんや千金の價にも天命償ふ事能はずして瑞光山に葬り、日數う



つり行まゝに、親友より悼の陰章もあまたあり、散失せんも本意なき事にや思ひ、こり縮め櫻木の沙汰に及ばれしは如竹の主なり。生前の慈愛忘れがたく、報恩の寸情なりとあるに、愚かなる筆を添へ序するのみ。標題も雪の晴可ならんさしかいふ。

亞聲坊

### 娛中坊追悼句集「秋の筐」序文

祖式尹哉

君知るや、あやめ庵娛中坊は本藩世祿の士なり。姓は穴戸花名は桃戎と稱せり。人となり質直にして詞少なく。喜怒色に顯はさず、よく人和を守り、壯年には文を學び、武を勵み、其旨を會得し。又餘力の風流に遊び、遠くははせを翁の風骨を追ひ、近くは白壽老師の洒落をしたひ、東武の祇役を願ひ、此師が膝下に一かたならぬ教示に預り、かつは瓜期に臨み、褒詞の前章ありて「驚も淋し附け子の行跡は」云へる此の餞章に風信の著きは顯然たり。さてよ歸杖の後は竹奥先師の閑窓に、夜さなく晝となく、奈良茶三石の功をつみ、道の流を繼ぎて、此の人ありと、世にかすまへられ、風名幾んど海内に鳴れり。未だ不惑の齡乍らも身多病にして常に勤務の仕へを惜しみ、聿に骸骨を乞得て生涯の安心を定め、花の朝には心を浮め、月の夕にはその氣を澄し、實に風騷の一奇人云ふべし。しかして凡そ三十餘年の星霜を上なき夢も明暮て八句に終りを取り給ひて

五四

二光速に巡り、今年此秋、唱名忌の正當なれば、其親族花奥撰里の兩士が命に應じ、聊か手向の小冊を物して、社中と共に夜もすがら、師の靈前に一燈をかゝけて、焚香し奉るならし。

嘉永五壬子秋九月下浣

觀耕亭 誌之

### 文臺開百韻前書

英 得齋

長門國阿武郡萩なる郷に古池の流れ残りて、今や絶なんこするを憂たひて、古き風雅男諸が同じ力をなし、心を協せて教の親を誰れ彼と頼み寄る事、月あり年あり、得齋も其友垣の一人なりしが、同じ郡の小川なる水車の清きあたりを薦隠れの草庵に老を養ふ身となりて、心ならずも其事を果し得遂す。然るに巴城なる老長の諸彦達予に再び教の親の重荷を負ひねと、百千鳥の百千に轉りて許さざりけるが己六十路の老の坂を越えし身の、かゝる重荷をさいなめど小男の鹿は八ツの耳なく、さくべうもなう受情ふ。考思するに一は祖の神の御徳に報ゆるなる、一は絶なんとせる道の爲にもこ、此重荷を負へる心こはなりぬ。時に明治十八年秋九月吉祥の日、夏木立の御句にすがりて、此道の彌榮えに榮え茂らむこきを、自ら祝し待る。

### 文臺披露五十韻俳諧の連歌序文

澤村臺雨

### 萩の茂り集跋文

増山清和

自 祝

そも我が巴城の里に、往昔古萩園より傳來の文臺は、五筑老師より領承せられし寶器にして、代々讓與し來れるを、故六木園主の歿後、予に嗣續せよと、當今獅子庵一瓢宗匠しばし、勸告あれども、素より短才の身、殊更年を重ねて老衰し、物忘れ勝にしあれば、再三辭するを再三の師命辭し難く、過分の任を蒙り、諸風子の補助をたのみつゝ、けふや文臺開庭の式を行ひ、會頭の任を負ふ事とはなりぬ。されば遠近の諸君より贈與ありし祝章、机上に山をなし、懇篤誠に謝するに堪へたり。老の面目何事か是にしらん。いさゝか自祝の意を表する事しか也。

先頼む木蔭も松のしげりかな

明治廿八年初夏念六日吉辰

七十五叟百霞井清和仙

### 立机歌仙跋文

伊佐一路

自 祝

不肖一路ことし七十七回の春を迎へてより、聽松庵のあるじ如水翁をはじめ斯道のかたぐより、厚き情をもて祝しまうさるゝに、何くれとなく其調度の品々を賜はり、父兄のいつくしみにも勝りて、祝賀のむしろを高大亭に開かれ併せて久しく世に隠れたる古萩園の文臺をも護持せよと、

やつがれ若かりし頃より此道に志あれど、いかにせん生來愚昧の上、無學無識にて其効もなく、行脚にはあらねど、徒らに鳥が啼く東の國の花を探り、久方の西の都の雪をたづね、蘆吹く浪花江の月を惜み、こゝには暫く杖をさぐめその道の人々と風交杯して遊びけるに、星霜の數を重ね、いつしか古稀の齡はなりぬ。老いては都會の賑ひも面白からず、古郷戀しく立歸りしに、舊俳友の誰かれも身まかり、實にも先師雲鯨宗匠の「一つ宛霞に入るや夕鴉」とよまれし如く、追々その友のへるに心細く、残る友ども折々風交して暮しけるに、豈計らんや、去年の冬聽松庵龍華宗匠の黄泉の客となられしにより、その文臺を予に繼續せよと、社中のすゝめなれども、及ばぬ事ゆゑ辭退せしに、再應の勤めにせむこまなく、その跡を襲ふべき人のあるまでと肯諾ひぬ。去ながら八句に近き老の身の記憶は皆無、眼はかすみ、耳は遠く、とても其位置に堪へがたけれど、社中の助勢せむこの情を杖にて、只庵主の名のみと云ふべしあなかしこ。

七十八翁 臺雨

附記 本書は大正五年の春、聽松庵で催された文臺披露の連歌の序文であつて、臺雨翁が文臺繼承の年月と、享年を推知する資料である。一見筆寫本かと思つたが、よく見れば石版刷の小冊子である。

九華生

五五



せらに勤めらるゝものから、借越の恐れをも顧みず、かぎりなからむ例に、俳仙のかたぐひにたすけを得て、歌仙行の一卷をもものし、おのづからひろく、此道の人々と老後を樂まんこと、身にあまるよろこびなりと、かいつけ待るはる風に吹るゝ樂の時かな 一路

瀧口明城翁遺詠鈔序言 作間鴻東

明城翁逝去せられて茲に一周年、追懷の情更に新なるものあり。翁の行狀遺徳及其の人を爲りに關しては、葬儀の直後、萩市並に東京市に於て行はれたる懷舊座談會に詳悉せられ、江湖既に定評あり。我等後輩は之を仰げば愈々高く之に臨めば愈々深きの感あり、夏淤の徒、素より一辞を贊する能はざる所なり。今更に言ふまでもなく、翁の靈活なる天性は、處世の各方面に挺拔し、殆んど行く所として可ならざるはなく、勲業徳行の長へに世範を垂るゝのみならず、詩歌風流の道にも造詣淺からず、花鳥風月を友として物外に逍遙し、名奔利走の熱鬧世界を超越して、別に明城一流の淡々悠々たる境涯を開き、日夕心身を其の中に置き、天然の自在を樂みしことも、亦翁の一面なり。明木村の本宅を洗耳洞と稱し、萩市河添の別業を江月居と名づけ俳號には如水の二字を用ひられしは、以て其の志の存する所を知るべし。翁は平生一景一物の眼に映じ、心に感ずる毎に、和歌に俳句に、漢詩に俗語に、必ず吟詠あるを常と

昭和十一年七月 作間久吉 識



萩地方の句碑

萩附近で余が探査し得た句碑は四十六基である。其内一番多く集つて居るのが大照院の梅林で九碑十一句ある。次は鶴江臺音声寺跡(国司家周邊)で六碑八句あり、其次は弘法寺境内で六碑五句ある其他の所は一、二の碑を算えるに過ぎない。余は先般來句碑に名をとどめた俳人の系統を調べたところ、大体大照院のは聽松庵系、弘法寺のは古萩園系、音声寺跡のは菖蒲庵系であることを知つた。以下氣付いた点に略解を加へながら順次記載することにす。

大照院梅林

月早し梢は雨をしながら  
住倦た世はうそなり月よ花  
すゞしいに我にもたせよ馬の綱  
四五本の竹におくありおぼる月  
右の三句は一碑石に連刻されてゐる。

芭蕉翁 盧元坊 東花房 五竹坊  
簡枕 致一房 亞声房 羅月居士  
茶に焚て水の味はなかりけり  
臘ハや世は一遍の雪の花  
花散りて月すむひ夜二夜哉  
竹の葉に蝶とまりけり夕曇

右四句は聽松庵初世、二世、三世、六世のものである。大照院境内には尙四世夢游房の「枯やぶや風おさまりて寒椿」五世雲鯨老人の「我そでに山風おちて松の花」の二碑があつ

す。其の吟詠を集録せる手帳に翁自ら題して雨蛙といふ。蓋し自ら謠ひ自ら樂むの意ならんか。雨蛙集は和紙四ツ折の大福帳様式にして、全部を七冊とす。この集に記録せられたるは明治三十年頃より昭和十年夏季までの雜詠にして翁の自筆もあれども、大半は房子夫人の手づから記せるものなり。昭和以後の國風は別に翁の自筆にて詠草と題せる冊子に集録せり。今茲一周年忌を機會として、房子未亡人の發意を以て、遺詠中より若干を鈔出し、翁の詞藻を追憶する資料とし、親戚知人の間に頒布せんとの計畫あり、予に其の編輯を委託せらる。予は素より翁の知遇を辱くせしもの、誼として辞すべからず。因つて自ら謏劣を顧みず、翁の集中より和歌百二十五首、俳句百五十吟を拔萃し、之に冠するに翁の略歴を以てし、この冊子を爲し需に應ず、若し夫れ翁の傳記編纂は決して容易の業に非ず。本書も編輯を急ぎし爲、漢詩俗語其の他金玉の篇をも悉く掲載するを得ざりしは、甚だ遺憾とする所なり。又翁が洋行中の詞藻は、歌俳を雜載し、類別の躰を失したれども、消息の順序に據りたるものなれば、讀者焉を諒せられよ。

た筈なるも今見當らない。

ここえ立つまで野梅かな  
ぬるる江や一日遊ぶ雲の影  
人声の聞へてさびし秋の山

金花庵仙里 夕庵梧義士 山晴

此一大碑は表面に翁を初めとし、支考系統の三師の名を單に刻し、句を標示してない。舊記におぼる塚と稱するものである。常々庵雨聽の墨直し会式の文等により、各師の左の句の眞筆が埋められてあることが知られる。

弘法寺境内句碑

芭蕉翁桃青法師 老譽歸童僊  
明譽盧元法師 古萩園社中建  
此一大碑は表面に翁を初めとし、支考系統の三師の名を單に刻し、句を標示してない。舊記におぼる塚と稱するものである。常々庵雨聽の墨直し会式の文等により、各師の左の句の眞筆が埋められてあることが知られる。

白露を翻さぬ花のうねりかな  
六月によき隣あり萩の花  
竿鹿もねに來よ萩に一夜庵  
よりのかぬ中の見事や萩薄  
次、以哉坊の句碑臺石に古萩叟建とある。  
萩に花のさく時來るも來たことよ 一如雪炊庵主  
星の光り尖く秋の暮て行 六花園素全  
あら花の散や閑のあるかぎり 成青  
啼りば淋しなかねばなほもかんこ鳥



碑石に菊水園花香發句塚、文政六年癸未二月十四日小倉実和謹建とある。

弘法寺墓地

水鳥の跡見かへらすなりにけり

父貫通千時明治二巳巳之初秋 建爲男子山本登雲助貫之

音声寺跡句碑

よき／＼帆ばしら寒き入江かな

蚊の声の次第に遠し竹の奥

美濃行首途

芭蕉翁  
其音

めぐる道の恩にはかろし雪の笠

筑紫行脚

恩の笠や着て行春の旅の曠

病中吟

淡雪や花と呼ぶ名の間はわづか

以上三句は一碑石に連記せられ、裏面に次の文字がある。

「石面の三雪を塚にあらはし報恩謝徳の爲在世に因める婦人連建立の趣竹奥舎其音是を記す文化十四丁丑正月」。其音は菖蒲庵の初世である。

木枯や空明て居る小松原

乙二

初めて乙二の名を見たとき、文化頃東北四天王として知られた白石の人、松窓乙二のこゝを思ひ浮べたが、其音の弟子蕉雨園棋声が編した「旅の花」と云ふ句集に在江戸長萩乙二とあるを見出し、是は萩の乙二のものであるを知つた

乙二は藩士で江戸在任中白壽坊に師事して居る其音の弟子と思はれる。

雪ミけや空はことなき水の音

尹哉

尹哉は菖蒲庵三世である

雨になりて動き静まる柳かな

吾朝

吾朝は藩士石津新右衛門のこゝで、川島小橋筋香川家の所に住し、天保十二年五月二日歿、墓は江向徳隣寺にある。此句碑は他の碑とは少しく離れ、国司家の墓地にある。

指月公園

瑞がきや月も輝く志都岐山

尙表に「六十九翁深耕亭有秋謹識」裏に「明治十六癸未年建阿部勘衛多々良宗義」がある。有秋は三見村藏本の人。

金谷天満宮梅林

むら雲はこれてすらり登る月

此君

裏に「明治三十五年四月建之孫愛二郎書」とある。愛二郎は指月公園に櫻を植えた兒玉氏。

香にそれと見あける梅に月おぼろ

有秋

多越天満宮境内

古池やかはづみびこむ水の音 はせを

人丸社境内

梅が香にのつと日の出る山路かな 翁

法福寺墓地

蓮葉の露のこぼるゝゆくへかな

たもの。

大谷梅林

天みつる薫をこゝに梅の花

佳兆

句の上に「夢想」あり、裏に「嘉永中墾此地栽梅焉長門阿武御民山本七兵衛信行」とある。

春もやややしきととのふ月さ梅 はせを

此碑殆ど土中に埋没して居る。江州粟津義忠寺藏板の諸国翁墳記といふ書に従へば、句の前後に「長門国萩鶯谷山本七兵衛梅林に有。志行建之」とある。

中津江元中村致堂庭園

川上とこの川下や月の友 はせを翁

名月や池をめぐりて夜もすがら はせを

龍藏寺庭園

雨よしと櫻見る／＼寝入りけり 羽衣亭 寛綱

東光寺境内

武士の露と消ゆく枯野かな 竹内勝愛

東光寺墓地

うなづかぬ石に涙や墓詣 兄直之泣吟、直之は河東氏。

明木村瀧口邸入口

花にあまるいろの雫や燕子花 桃楊園主如龍翁吟詠

男 吉良敬書

三見村手水川路傍

三峰照る月影波むや手水川

無署名

松江齊中井英之進安政六年八月十六日とある。

海潮寺本堂前

亦も薫る風や慕ふて手向塚

臺石に「東都北原氏之塚天明八年申六月六日社末某立」とある。

安養寺墓地

鶯の声きながら眠りけり

時興居士

裏に「文化元甲子三月十二日阿川貞行」とある。貞行は阿川の瓦師阿川家の四代である。この句碑は昭和廿八年二月河添の隆景寺跡より移されたものである。

梅藏院墓地

ひみ葉船ちつて湖水の行衛かな 生年十五机蝶

机蝶は萬延元年七月十四日に歿した魚棚の熊谷巖三郎である。

三千坊墓地

夜の明るまではしぐれて松の風 清和居士

清和は古萩園六世増山氏、墓側の石燈爐に「遺吟松声拜写」とある。

玉江観音院本堂前

月見せよ玉江の蘆を刈らぬさき はせを

大谷岡本家庭園

うぐひすののぞく谷間や梅かをる

署名はない。是はもみ大谷日吉神社（疫神社）境内にあつ



三見浦観音堂前

うたがふな潮の花も浦の春 はせを翁

大井村高倉神社境内

松風の落葉に水の音涼し はせを

裏に「此句石當村集連の建る所にして樓西居主人も志を同じくす天保六年三月十二日」を刻してある。

宇田郷村興昌寺庭園

うたがふな潮の花も浦の春 芭蕉翁

六島村肥島

懐しき島見かへれば風薫る

只月

こは只月翁が大正十五年五月肥島に行つた時の句で島主高須太助氏が同島入口の巖へ刻せしめたもの。

萩の神社に掲げたる俳諧の献額

一、金谷天満官俳諧奉納額

一、四季の発句、

寛政五癸丑歲孟夏吉祥日梅榮齋一羽九拜、一羽の他の献句者は次の通り、巴要、五山、魯甲、霞晴、菱花、羽曲

二、俳諧六々韻 大雅亭 撰

追加に次の句がある。

其露も潤おふ里や稻の花

採芝園

清く酌んで戻る潮や霧の朝

大雅亭

この他の献句者は次の通り、里井、可青、桃一、一露、

五、金谷天満宮奉納 三千句集

四、はいかい四季の詠

嘉永五壬子榎見月吉祥日

敬白

盡せしな神の恵みも千代の秋

この他春夏秋冬十句 兎双観 敬白

嘉永六癸丑十月吉日 願主 竹奥舍門人

五、金谷天満宮奉納 三千句集

俳諧遊か嶋 一般献句者名略 追加句に次の名がある  
里晴、湖月、父斤、吳巷  
安政二乙卯陽月吉祥日 四睡庵 敬白

六、俳諧孤山の奥

四睡庵 撰

撰者の句、寒そらやます／＼松の青くなる 壺翁

追加の献句は次の三名、朶柳(会林)、三保、榎里、其他の献句者は次の通り、鳳子、左右直 虎角、五折、柳絮可調(佐々並)、梅雪女、吾友、樵儂、應々、一溪(ミサキ)、香寸岐、佐竹女、其曉、杉翠(佐々並)、梅志、仙子(佐々並)、花輯、花朝、羽扇坊、二所、孤舟(ムカツク)、二竹、未盛、湖嵐、虎遊、畑草、蝶雅、毛穴。

萬延元庚申年十月吉曜

七、俳諧若葉寶

聽松庵 撰 明治六癸六月日

撰者の句、くゞる時顔に風吹く芽の輪かな 幽草

献句者は次の通り、常盤連一曉、白水連后山(会林)、萩江連里琴、三隅連器水、橋南連椿窓、小松江連花月、奈古連花友、汎江連南春、平安古連尤咎、秋吉連玄之、瓦町連竹風、田町連志月、中山連養我、北門連都月、明花連茶交、白水連竹外、白水連春坡(会林)、白水連松隣(会林)、白水連倚岳(会林)、白水連一章、以下月景まで八名は白水連なり、紫山、旭亭、春樵、一章、二福、露友女、指杏、月景、以下五名は小松江連なり、鶴儂、榎子、秀一、津峨 榎月、汎江連南春、宗頭連柳雪、三隅

一、金毘羅社奉納 千句集

聽松庵 撰

二、金毘羅社俳諧奉納額

明治三十五年五月三日

幾年の句ひ戴く神の梅 会林 木林(椿西)  
梅に添ふ月や千歳の影尊とき 評者 草琴  
他の献句者は次の通り、机睡(紫福)、奄月(佐々並)、示甲(椿西)、如龍(明木)、和生(紫福)、菊壽女(椿西)、大笑(萩)、壽老(萩)、松月(紫福)、水畔(萩)、旭山(明木)雨翠(椿西)、里旭(明木)、柳水(佐々並)、一柳(佐々並)融三(萩)、雲鳳(萩)、柳水(明木)、金水(紫福)、石客(石見)、菜咬。



はいかい和光の影

撰者の句、夕月やみな満足な影法師

蘿月

この他献句者は次の通り、河見樓、会林素周、一葉、龜泉、会林登龍、雷友、飛入、柳平、文憐、鼠六、一草、松兒、里松、一二、会林計流、和風、梟洲、中逢、晋流、蛭子連、菱湖、旭枝、水玉。

千時安政六巳未初冬吉辰

会林 敬白

二、金毘羅社奉納 千句集

露寅庵 点

撰者の句、御稜して我身にかへる我家かな 赤菫

追加の句

涼しさはすがりて眠る竹柱

子英

舟と舟つなぎて流す夏の月

市仙

この他献句者は次の通り、九十翁竹立舎、雨来、馥風、風也、梅月、飛入、喜三、梅月連、花表、龜泉、鏡水、花蝶、松韻、化水、野月、臺、松旭、一潤、中逢、花山、附記、九十翁竹立舎とあるにより、此献額は安政六年のものであることを知る。

三、俳諧船の上

芭蕉堂 撰

撰者良大の句は存するも風化のため讀むを得ず。

この他献句者は次の通り、壽仙、玉翠、三都女、会林、醉夢、耳洗、誠美、笑々、志月。尙少しく存するも明かならず。

三、多越天満宮俳諧奉納額

一、多越天満宮奉納五千句集

俳諧通夜籠

露宙庵 撰

赤菫の署名ある撰者の句終はりにあるも文字不明。その他の献句者次の通り。

壽山、染水、松月、嵐翠、玉露、壽水、松露、赤川、三射、樂山、一笑、三雨(青カゲ)、壽學、惠風、かため、一撰、梅好、可静、雨翠、千鶴、習也、再昌、風也、月梢、其白、尾山、里旭、一蝶、一眠、貴交、揚樂、丘塊、子柴、是流、梅似、石水、里遊、五嶽、西部、花蘭、笠、かしこ、勝和、琴子、句花、桃壽、鶯孝、自我、遊旭、利徳、路芳、青山、豊柳、梅年、風和、千鶴、淡水、山人、虎遊(明木)、鬼丸、可考、生萩、花松、梅風、赤水、松宇(先大津)、鳳玉、兎月、白花、一友、砂鳥、省蘭、垣甲、瓦山、岩洪(大井)、窓庵(玉江)、竹立(八十八翁)。

安政四丁巳葉月祥

二、奉納天満宮御寶前千句集

はいかい銀世界

撰者 扶桑庵宗匠

撰者の句、菅公詠史、廻文

きつこ名は残りけりこの花さ月

龍華

追加に山河(秋永安重三郎)の句あり、この他献句者次の通り。生雲十三名、汲水、二舟、耕雲、小仙、白水、和水、

この献額既亡失、献句者名不詳

五、人丸神社奉納額

一、諏訪明神社に献納せる狩獵俳諧額

諏訪明神社は人丸社と合祠せられた時代があつた、それで此所にこの額が残存するのである。この額は獲物の種類、それを得た所、狩獵者の名前などがあり、珍らしいのでその全文を登載する。

奉納

そも和漢に山里の吟獵は私の物好にあらず、されば文鳥館公子の御狩を催して、萩府にちかき四方の山々に射立して、鳥銃に名を得し人々、その地名を分配して、題に給はり、五七五の数をつらね、御武運長久過なからんやとの御祈念のために、名におふ華園市に鎮座ある諏訪明神の寶前に奉納せさせ給ふ物から、そのあらましを爰に伝へて題し侍る。

庄屋畑 打つも恵み庄屋畑や雪の狩 文鳥館

源平 源平の戦をまねて雪のかり

金山金砂

クハタ ぬた打つ三菊の花ちらすくはた哉

国司詞六

辻堂 つじ堂や時雨をしのぐかりの連

二宮二遊

扇子平 御狩場の威徳仰ぐや扇ひら

小幡佳董

齒菜ノ迫 猪かりや雪ふみ分る齒菜が迫

小倉顯境

神ノ木 神の木を小楯にとるや冬のかり

日野可透

四、住吉神社俳諧奉納額

一、俳諧夏の山路

瓢々庵 撰

撰者の句、涼しさや波打かゝる馬の綱 瓢々庵〇哉

この他献句者は次の通り、羽扇(京)、菊水、子貫、梅枝、羽仙、醉花、一江、玉葩(女)、一羽、人工、松露(女)、井志、盃止、松月、喜棟、里冬、澁木、里寶、朱タイ、松虎。

三ッ輪連会林

梅枝、一羽。

二、住吉神社二百五十年祭奉納

はいかい盛る日の影

二葉園 評

住の江にすゝしき影や神の月

評者草琴

明治三十六年八月十六日



手水鉢 ゐの子猪うつ遙拜や手水鉢

追神好友

谷ノ射 雪の日は一トきは寒し谷の射

榎本 一

小川尻 来る鹿のわたりは爰ぞ小川尻

小幡和風

左り迫 ふる雪や猪のころげる左り迫

相原如杉

石菖場 吹雪にも静かな射や石菖場

金山夏山

三ッ合 三ッ合は猪の爪結ぶ其猪かな

坂田石処

椿 藪 猪狩や打ちらしても椿やぶ

吉田柳水

杉 谷 猪も手を負ふ杉谷や雪深し

安藤其麗

札ノ元 さを鹿や射とめもしるき札のもと

武藤如基

下釣瓶 狩暮て水音高き下つるべ

久坂三樂

二本松 猪狩や霜の花ちる二本松

長野其白

渡り谷 し、狩や渡り谷射の玉霰

烏田鳥村

涼み松 名に愛て夏、狩する涼み松

渡邊素石

滑 口 かり暮すあとや吹雪に滑口

周田鳳兮

十文字 雪の狩や猪の爪あ三十文字

宇野兎郊

柳 谷 こゝろあるか春は臥猪の柳谷

河井可睡

藤ヶ藪 射立人はひてよりけり藤が藪

信国里鶴

梅ヶ浴 猪かりに道の枝折や梅が浴

勝屋華橋

天狗松 狩毎に鹿の音へりて天狗松

三戸龜遊

茶木畑 その花にふり向く鹿や茶の木畑

梅田梅園

評定場 積雪に手筈ならずや評定場

山縣自笑

櫻 崩 狩くらのもどかに櫻崩しかな

岡 競紫

石ノ休み 猪うつこ石の休みの楷火かな

岡 露洗

本谷杉 ほんだにの杉に猪うつ玉あられ

眞鍋利風

森ノ渡 テウかりやもりの渡りの玉霰

相原如臍

羽衣山 御かり勇み舞ふとや羽衣の山長閑

大中湖梅

新建山 手配りを守る新建の茂り蔭

早川以帆

追 山 さこ山や霧の中ゆくかりの連

橋本湖秋

日輪山 日輪の谷は冬さびす御狩山

石津豊朝

天保十二年三彌生

連中

二、人丸神社奉納額

敬白

寄進

模墨樓 專二公

二公十五代毛利齊廣、十六代毛利敬親、との張紙あり。句の上には題名をしるしてあるも、こゝには句の下の署名だけ記した。

守田谷、平川瀾、光田鶴、眞鍋嶺、佐伯鷺、山田苗、粟飯原原、佐々木木、渡邊邊、山縣山、湯淺邑、小倉網、周田友、河井玉、會彌朝、赤川艇、賀屋鶴、豊田稻、桂影、城駒琴舛。

追加 久芳二藤、藤二遊、国司詞六、国司山司、坂田二牛、弘沼路、弘ム弓、中沢雪東、山中鶴羽、富田富川、和智和中、中沢竹友、中山山溪、富田富山、和智可笑、本間松間、齋藤發波。

嘉永七甲寅九月廿八日

三、奉納

はい諧高津の春

如竹庵 撰

追咥に素秋、藤花(女)の句がある。その他献句者次の通り

鶯花(女)、松陰連、春山、茂り、柳花女(保隣連)、楓雨、

月光 保隣連、一露 保隣連、飛、朝月、柳水、玉蘆、

如人、風花女、谷除、蟬吟、空青、一蝶々、一止(吉調連)

柳枝、一柳。

千時文久紀元

林鐘日

催主

龜案

敬白

四、奉納

俳諧田参

芭蕉堂 撰

この額は拜殿外壁向つて右側にある。終りに撰者良大の句がある。その他献句者次の通り。

壽仙、誠美、里井、醉夢、富水、怒水、湖村、耳洗、兎友

柳甫、会林、一計、静雲、梅黄、志月、指蘭、是香、三都

律友、雪流、娛秀、梅友、余力。

五、献納

俳諧秋最中

文友堂 撰

この額も拜殿外壁向つて右側にある。終りに撰者小僊の句がある。その他献句者次の通り。八声、一瓢、谷椿、月川

山遊、猿の屋、小丸、壹月、正方、鈍空、里仙、松雫、竹

里、竹友、石雅、松花、里僊、其雪。

明治甲午三重陽

敬白

六、奉納

俳諧戸田詣

文友堂 撰

この額は拜殿外壁向つて左側にあり。終りに撰者小僊の句がある。その他献句者次の通り。

秀翁、可積、柏子、壽山、梅雫、玉兎、松月、季文、松雫

和心、華風、里琴、獨樂 律友、如泉、月川、梧竹、泥牛

小丸、三休、弊風 静香、呂聽、樂小、松山、春光、琴菊

如水、石雅、余力、舟遊、何哥、一花、遊里、洗草。以下

追加、一瓢、野干、山遊、棋遷。

明治四辛未首夏

萩に於ける芭蕉翁二百五十回忌記念句會

昭和十八年十二月十二日、萩市三千坊で、標記の会を萩文化聯盟主催、原田只月指導の秋声会后援で開催した。同寺住職の讀経、追悼句献詠句の披露、只月翁の講話、来会数氏の所感談、席題時雨、枯野の作句、聽松庵伝来の珍品、諸家藏品の展観があり盛会であつた。記念の爲め一句宛を認めた額を金谷天滿宮に献納する豫定であつたが、戦時中で適當な板を購ふことが出来ず、終に沙汰止みとなつた。因つて此処にそれ等の句を、只月翁の追悼之辞を記すことにした。

献納豫定句



時雨るゝや鋪道に残る終焉碑

師の像へ黙座久しう秋灯下

あこ追ふて乗せて貰ひぬ紅葉駕

手すさびの翁の像や桃青忌

百舌たける枯野や二百五十年

芭蕉忌や三千坊の廣書院

時雨忌や折々日さす寺障子

芭蕉忌や戦果もホ句も南北に

翁忌やあしたを兒等と遺吟誦す

沖賣のいたく時雨れて着きにけり

これほどの大御戦に翁の忌

やり過ごす車塵に落葉舞ひあがり

木枯の曉天神に誓ひけり

けふ二百五十年目の時雨かな

水仙を手向る袖に初時雨

うらさびし憂き寝のこもの時雨かな

一人居の灯らぬ膳に初時雨

若人の門出の驛や初しぐれ

句もなく枯野夢むや桃青忌

句もなく枯野が原をとほくこ

銅像は櫛の儘に時雨けり

粥たりて猫と氷雨をさゝにけり

生涯の一句を念す桃青忌

金子三木

久芳孤雲

福田無声女

田總白山

吉岡羊角

杉山ヲ雞

今井椿十

久保雲仙

梅村臥牛

河合香城

石田不盡

村田牛耳

田中対雨

伊藤無風

安藤橙里

隅 人

井町滿壽代

小野村ミツノ

中津江松代

富田文字

逸名氏

村岡白鳥

都志見木吟

尊さや枯野夢みて逝く姿

此道や綿々こして幾時雨

枯野めぐる夢破れて二百五十年

追悼之辭

山本北汀

桑原萍雨

竹内八郎

六六

### 附 録

#### 一、萩附近の俳人

萩に常住した俳人を網羅して掲載することすら困難である

幾時雨偲ぶや夢の枯野原  
昭和十八年十二月十二日

聽松庵十四世 只月

況んや調査手懸りの少ない村落の俳人の事績を記述することには、全く自信が持てない。然し是等の人々は慧星的に来遊した行脚に較べて、萩との交渉の多いことは勿論である。因つてある時代に於ける萩の宗匠を中心として残された記録或はそれ等宗匠の撰評した神社の献額を主なる資料として、不完全ながら本文を綴つた。

#### 三見村

冬曉、寄月。以上二名は嘉永五年金谷天満宮献額に見ゆ。  
吉村雪洞、坪井呑鯉、坪井鯉羽、坪井春樵、鶴枝、淡水、仙婆、三江耕雲、岡部養我(中山)、深耕亭有秋(藏本阿部勘衛)、以上十名は明治九年より明治十三年に至るまでの幽草日記に見ゆ。

蘭有(白上雅之進)、明治廿三年の黄鳥集に見ゆ。  
有豊(有秋嗣子)、護秋(有秋弟)、以上二名有秋追悼句集(明治廿六年)に見ゆ。

#### 明木村

虎遊、安政四年多越天満宮献額に見ゆ。  
喜樂、幽草宛(書簡にその名あり)。  
茶交、如龍(瀧口如水父)、明治六年金谷献額に其名見ゆ。  
旭山、里旭、如龍、柳水、明治卅五年金谷献額に其名見ゆ。  
松月、圃僊、明峰(瀧口清作)、瘦骨、蛸夢、石仙、春風、秋月、春浪、霞樵、勝旭、柳水、藤園、松風、×生、溪月(光永卓爾)、豊村、石陰、梅宇、春海、裕耕、松霞、如

月、以上廿三名は大正六、七年に原田只月より指導を受けた明木俳壇の人々である。

#### 佐々並村

可調、杉翠、仙子、萬延元年金谷献額に見ゆ。  
奄月、柳水、一柳、明治卅五年金谷献額に見ゆ。

#### 福川村

井上夕庵宙々坊とも號す(幽草が師事せし人、文久三年には九十歳である)。葦生、幽草の旅日記に見ゆ。

一様(中村龜太郎)、明治十五年に幽草追善の句がある、尙明治卅七年多越献額にも見ゆ。

其松(岡吉輔明治廿四年四十歳にて歿)、南松(其松嗣子)、旭亭、靜雨、東雲、青我には夫々其松追悼の句がある。

照月(阿武熊藏大正十三年、昭和十八年の作句を見る)

#### 生雲村

二舟、繁女、耕雲、小仙、白水、和水平、碧水、梅の舎、其水、素水、雅遊、朧花、樂水の十三名は明治三十七年多越献額に見ゆ

#### 紫福村

賀山(原惣兵衛)、明治廿三年黄鳥集に其名見ゆ。  
机睡、和生、杉月、金水は明治卅五年金谷献額に見ゆ。  
一曲、輪木、翠軒、梅村は明治卅七年多越献額に見ゆ。この内一曲は大正十三年の如水社中の例会にも出席して居る



大井村

樓西居(天保六年頃の人)、  
岩洪、安政四年多越献額に見ゆ。  
観瀾亭桴一、麓遊亭竹友、塵揚舎左鹿、一蛙、得玉舎石水  
松琴、杏庭、青波、竹哉の九名は文久二年頃の人、幽草旅  
日記に見ゆ。

奈古村

花友、明治六年金谷献額に見ゆ。  
阿武彌白、小野竹窓、桂月、中村舟月、阿武一露、一松の  
六名には竹重草琴追悼の句がある。  
舟月、花月、苔石、富浦、不及、西向、園女、芳子、菊女  
仙国、只仙、花仙の十二名には伊佐一路立机祝の句がある  
須佐村

鶴居園麓耕、明和七年頃の人。

高男、櫻泉、尋女、如水、稻雲、語鳥、琢玉、高女の八名  
は明治三十七年多越献額に見ゆ。

大津郡

不易亭爾松、霞江舎蘆習、可伯、山洛、此休、酒公、一致  
里朝、不流、鶴枝、瓢州、干跳、舟也、一素、白芳の十五  
名は安永頃の人、爾松蘆習の紀行文「枝折」に見ゆ。  
松宇(先大津)、安政四年多越献額に見ゆ。  
浦春(沢江)、柳雫(宗頭)、一花(三隅)、器水(三隅)の四名  
は明治六年金谷献額に見ゆ。

健石、語石、如髮、計玉は仙崎、爲一(三隅)の五名は幽草  
主催の健石追福歌仙に見ゆ。  
孤竹(三隅伊木尙勝)、津々彦(沢江福江秀助)、壽豊(大津  
郡中村豊輔)、窪高(大津郡窪田太郎祐)の五名は明治廿三  
年黄鳥集に見ゆ。

一、県外轉住の俳人

素猩(淡路乃美宣)。  
清香(渡島)。  
蓬宇(三河)。  
雪暉(山城山縣九郎右衛門貴速前名松原音三)。  
三夕堂秋水(東京粟屋清彦)。  
附記、この部に算入すべき人は尙々多数あること、思は  
れる。

追 録

余は去る九月二十日本書活刷が完了する直前に、田邊萩公  
民館長(厚意)より、一、青田のさそひ、二、墨直(並)  
臚庵小祥忌歌仙、三、櫻のゆるし、四、翁塚集の四版本本  
を見ることを得た。一、二とは美濃の宗匠河村再和房のこ  
こを主として書いてあり、萩との関係は少ないが、三は高  
木百茶房が長門遍歴(記録)であり、四は烏強を主腦とする  
聽松庵社中が編した亞声坊の追善句集であり、吾々に直接  
関係の深い好資料である。余は兼て此種の書物の出現を翹

長門に於ける高木百茶房の足跡

し誤りがあるかも知れない。以下百茶房の行程、序文、前  
書の参考になるものを抜録する。

望して居たのである。百茶房は恐らく萩へ来遊したものと  
思はれる。余は前文に書いて置いたが、三により間違ひの  
ないことが確かめられた。又「旅の花」序文中に唐波庵は萩に  
於ける正門の始めであると記してあるが、唐波庵のことは  
全く不明であつた。それが三により天明六年頃には怨風、  
嵐阿、東之、素調の諸士が主腦であつたこと及び其他社中  
の雅名も知れ、尙此時よりも大分古くから、美濃宗家とも  
関係のあつたことがわかつた。尙里川の前書により、以哉  
の来萩は安永六年であると云ふこと、その滞萩の日数も  
略ぼ判明したことは有難い。亞声坊の歿時は不明で書いて  
置いたが四により文化五年の發病の年か、おそくとも文化  
六年には歿したことが確かめられた。猶聽松庵系の墨直し  
会式は当然臨江院で行はれたと考へられる。書いて置いた  
が、文化六年十一月には古池の句碑を圓政寺(現時の多越天  
満宮境内にあつた)に建て、社中百五十人も集まつて墨直し  
会式を始めたことが明かされた。余が前に記した説は此  
時以前又は壺公、幽草時代には当てはまるのではないかと  
思はれる。又橋下坊の名が「雪の晴」に見え、烏強よりは右  
翼、亞声坊の次に位する様であるので、取り敢えず萩人  
として取り扱つたが二と三により、豊浦郡内日村の人、素  
礎云ひ、中央でも相当名の知られて居ることがわかつた  
尙又三と四により、当時萩附近の俳人の雅號も数多く知れ  
たので、参考のため採録した。然し是等俳人の住所には少

高木百茶房は美濃派俳諧宣揚の爲め、朝暮園大野是什坊の  
代理として諸国を遊歴し、萩へは天明六年八月に来て居る  
その時の紀行録である「櫻のゆるし」により足跡の概略を述  
ぶることとする。百茶は石州路を経て長門に来つた。宇田  
の浦を過ぎ萩に向ふ道すがら、そほ降る雨の中を漸く周古  
亭にたどり着き、待請のちてなしを受けて居る。周古の住  
所は明記されて居ないが、奈古か或は大井であると思はれ  
る。八月の初め萩に着き、先づ臨江院内の聽松庵に致一を  
訪ひ、其処で盛んな歓迎歌仙の会が催されて居る。續いて  
聽松庵連である仙里の所で靜かな会合があり、又唐波庵連  
の会合が怨風の所、素調の所で催され、古萩園連の会合が聞  
キヤウの所、里響の所、琴阿の所、尾調の所、里曉の所、里川  
の所で催されて居る。最後の会合が何日何処で行はれたか  
は判明せないが九月九日の菊の節は萩で過ごして居る。余  
の推量によれば萩留錫は四十日に垂んじし、九月十一日頃  
美彌郡大田に向つて發足して居る、以哉の萩滞留は十余日  
であるに比ぶれば余程ながかつた。大田では仙兒の所に泊  
り短歌行を催し、それより伊佐に至つて路周の所に宿り、  
更に九月半ば過ぎに内日村の素礎の所に立寄つて久濶を叙



べ、下関では蘆秋の所に落ち付いて居る。

序文前書補遺

翁塚集の序

聽松庵社中

祖翁の徳光海内に輝き、普く正門の俳風に靡き、東は松島象潟より西は松浦箱崎まで、其遺蹟を石に刻して魂をまねく便りならんと翁塚と號け、句塚と呼び伝へて、道の尊重を崇めずといふ所もなし。我巴城の端々にもその碑を営みながら、郊外の事にして、雨につけ風につけ、老の運びのむつかしければ、厚信の誰れ彼れ發起してまのあたり圓政密寺なる聖廟の境内に塚造立を思ひ立ち、彼の古池の蛙は正風開闢の尊險なればと、頻りに衆議一決し、碑面は先師の染筆を乞ひ、同志の人々力を合せ、土石の功終へ待りぬ。斯く先師警束を携へ、此集冊の編撰なりしが、文化辰の春より病におかされ、序詞のみを果さずして終に黄泉の旅に赴き給へるにぞ、おのゝ遺志を継いで、同巴の冬しぐれ月十二日、祖翁の正忌をもて大会を遂げ待りぬ。其日集れる連衆百五十有余人に及べり、是はた先師の遺風を伝ふる本懐ならんこゝ、既に梓竹の沙汰に及んこする日、その事を序せんこゝ、社中の衆評に任せ、例に杜撰ながら、先師にかはりて各聽松庵の窓下に筆をとり待りぬ。自今洛東雙林寺の会式にそひ、年々三月十二日をもて墨を直し、千載の後までも、阿武の松風吹き伝へて、この碑の朽ぬ限りは變

るべからずとしかいふ。

文化七庚午冬

聽松庵 社中

「櫻のゆるし」に記されたる前書

萩聽松庵連短歌行の前書 一

濃の百茶御房この巴城へも経廻あらんと、深切なる伝にあつかりしは、さみだれ降る初にぞありける。さらばと社中の人々へも吹聴して、今日や翌日や待侘しに、空すみ渡る仲秋のはじめ、健かなる来杖をよろこび、庵前の橋に出むかへ請じて。

待得てはこゝろも晴つ月見月

致一

秋たのしさの誠しる友

百茶

聽松庵連短歌行の前書 二

今宵の風流無下に見捨ざらめやこゝ、おのゝ聽松庵に会せらるゝに、折よく空も清らかに、柳瀬の流は窓前に潔く、右に消魂の橋あり、左に櫻江のわたりありて、往來の騷人引もきらず。あたり近き面影山はその玉江に影をうつし、鶴江の蘆に雁も啼、折からの興を添ふるなるにぞ、峨眉洞庭の風色はいざ、不破姨捨の眺めとてもいかで此うへに出べきやこゝ、例の旅情もいつこにか忘れ名に負ふ筆染川のゆかりに筆をこりて、即事の一句を興じ侍るならし。

こゝ闕ぬ旅の空もけふの月

百茶房

しかし夜寒き庵の明捨

致一

聽松庵連短歌行の前書 三

まつ宵良夜は聽松庵の騒會に風興をつくし、こよひ桃紅舎においていこ静なる詠めに、猶さら心のたのしさにぞありける。

いざよひや所かはればしなも又

百茶房

迎へおくれの軒のうそ寒

仙里

萩唐波庵連の短歌行の前書 一

この地に唐波庵といえるは、ふるきその名のきこへありて、老輩の二三子これを司どらるれば、其門の滑稽月に日に榮えて、我が美濃の宗師へも志をはこぼるゝ事年あるより、予もことし西遊の杖をしばらく爰にこゝめ、社中の人々へ面会を期せるも、是よし同志の幸ならむか。さは是まで連綿たる風雅のいさをしを感じ、猶はた行末の繁榮をも祝しことぶく事しかり。

咲つゞく道も榮えて花野時

百茶房

時得て月の明るさも今

素調

唐波庵連短歌行の前書 二

五竹雪炊兩師の遺教を普く海内に諭し、正門の信厚からしめむこゝ、朝暮師の頭陀にかはり、関西を経歴ある百茶御房の杖を、しばらく爰の唐波庵にも寄せらるゝにぞ、予もこゝろ黄門下の名数につらなり歸童師の膝下に教示を仰ぎ、殊に哉師此地へ引杖の折からは、老仲間

稱にあづかり、その教諭もいこ懇なりしより、嵐東の両士共共に、身に應ぜざる唐波の社中に、主務を司どりしが、ことしは二三友に其事を譲り、無礙房に老後を樂み留客の號をも削りながら、師のゆかりなつかしく、今日

は御房を草扉に請じまるるに、誠や故師の御坊達に向對の思ひをなし、自ら解せざるこゝども問ひあきらむるのたのしさを申述る。

老の秋もわすれてけふのたゞ樂し

怨風

詠めもこゝろに月の明暮

百茶

唐波庵連短歌行一折の前書 三

百茶御房此ほどの地に杖をこゝめらるゝより、しばし席をかさね親しみを積む物から、予が中莊桃園にも、ひこ夜茶話あれかしなど約し侍るに、夜となく書もなく、書音の贈答かなたこなたの招きにいこまなく、既に行先へ旅だゝるゝ日も近く成行まゝ、今日や菊の佳節こいひ、ひたすらに招請し侍る。

幸ひにことぶきすゝむ菊の酒

素調

千代もこゝろこの宿の秋

百茶

古萩園連の短歌行の前書 一

今は十とせの昔ならん美濃の兩師のなつかしく北方黒野に旅寐して淺からぬ教示に預り、その明のとしは哉師の駕を我が古萩園に迎へ、十有餘日の留錫も誠にふかき師恩こはいふなるべし。猶はたことし朝暮先生の添書を携



へ、師命のおもむき頭陀うらかけて、二百余里の行程恙なく、萩の此地に來錫ある細竹庵の主雅を待請祝して。むかへたるその杖も今ぞ竹の春 里川

月のやどりにこゝろのびやか 百茶

古萩園連の短歌行の前書 二

古萩園の主人は風雅の信淺からずして、としごろ五竹雪炊の二師に教示を肯ひ、その修行地にもつばら精神をはげまされしとは、噂のきこえ侍るより、しきりに床しかりし。此度の面語をよろこび、ある日は越方行末のものがたりに倦ず、ある夜は道の推敲にたのしみて、思はず留杖の日も重り侍れば。

長いこはおぼえず幾夜咄しても 百茶房  
心も月も晴し此ごろ 里川

### 萩俳諧師名簿補遺

天明六年（櫻のゆるし）に據る）

以下一一八名は聽松庵社中の雅號

致一、干跳、不流、吟路、霞夕、吳笥、志漸、琴雨、柘言、電路、盧淵、葉舟、蓬蘆、一霞、芳度、之琴、如錐、烏強、右和、可由、未有、如岫、爪遊、素白、以因、器成、舟也、主山、井蛙、遷干、蓮子、雨橋、梅之、涼雨、流古、臥石、椹李、度柳、蘆谷、二咲、只今、理外、泗水、其流、蘆山、魯艸、只靜、氷枝、只美、仙里（桃紅舎）、源々、故交、徐

以下の八名は古萩園下生雪連の雅號

柳下、曲歩、和井、里園、藤主、探霞、里雪、器水。

以下の三名は句の前書により奈古大井邊の人の思はる。

周古、味夕、可香。

文化六年（翁塚集に據る）

亞声坊、烏強、芳州、麥夫、蘆吹、佳兆、綠江、可春、李一、度燕、春耕、几效、扇治、内顧、浪兎、路朝、浩々、路又、泉里、蘆風、蘆習、競紫、涼宇、只明、千翠、可実、至石、佳雲、可慶、茂柳、有幸、以交、貫四、歸鳥、時縫、洪涼、梢鳥、松秋、露狂、喜遊、芳雨、涼途、霞丈、芽逸、流故、松下、其柳、一応、爾松、梅之、化乘、鶯黃、り遊、箕山、蘆谷、再古、線之、巴水、其蹊、芽翠、泉路、又玄、巴陵、如迎、朔路、杜考、霞舟、一交、花郷、夢蝶、梧葉、其舜、只美、二省、一挙、其調、尖羽、湖雪、其秋、其耕、梧宙、和水、花醉、湖舟、花友、以慶、可滴、似遊、器成、可応、風里、度江、岑路、芳流、喜春、松虎、東鳥、其枕、春路、賈乙、花朝（沢瀉館）、蘭暉、東岐（觀瀾亭）、里風（女）、文思（籬庵）、嘯風（涉月亭）、宇峻、佳朝、揚花、其獨、習之、芝芳、野薰、仙雅、花游（女）、羽考、浹花（女）  
惟水、烏效、雅遊、凡器、花迪、梧水、圯南、可文、右菊、芳節、下風、如水、蘆雪、柳下、薄露、積翠、里虹、花睡、燕之、池柳、柳絮、可朝、未応、閑里、素涼、布曉、和翠、化乘、花州、春芳、遊虎、一夫、志迪、砂鳥、嵐丈、鷺朝

行、此柱、圃習、露声、之塘、以中、布雪（女）、芝童、凡故、鶯雪（女）、穗次、翠羽、尾次、度考、文正（女）湖笑、一孤、五雪、嵐岩（女）、青海、霞郷（女）、荷風、態雅、絮遊（女）、波成、梧忠、春虹、有江、燕友、慮淵、里井（女）可笛、蓼花（女）、龜遊（女）、歸蝶、南十、揚舟、吟路、不灌、露徑、一路、可白、路又、舍楊、呵白、燕之、糸貫、里又、未夕、可定、吾栖、梅之、流故、止一、トウ也（女）東朔、一孤、朔路、寄蝶、露声、一孤、泉之（女）、遊羽、霞夕、意水（故人）。

以下三〇名は唐波庵社中の雅號

怨風、無礙庵、素調、桃花園、李蝶、蘆習、芝風、湖悠、霧中、稼山、菊翁、似翠、東之、李園、白鱗、羅知（女）、月齋、和炊、露亭、避管、嵐阿、欲四、松干、雨柳、里正（矢田）、蘆工（宇田）、榛山（少女）、比松（盲女）、文調、可笑、素遊、可得（故人）。

以下四六名は古萩園社中の雅號

開キヤウ（竊樂觀）、里響、砧亭、琴阿（古池庵）、尾調（松風窟）、里曉（望鶴舎）、怨風、小篋（女）、里川、東川、篤志、五全、一水、巴靜、蘆鶴、一徑、壺滴、拳白、幹虹、瓢流、蘆工、流巴（盲人）、故來、貝原、里華、写蝶（女）、紫園（女）、枝鳩、二園、琴風（女）、虎丸、一和、時遊、龜睡、不尺、幹蛙、溪子、左江（故人）、其柳（故人女）、文糸（女）、喜春（女）、小波（女）、蘆雀（盲人）、巴松、里水、扇車、湖舟。

素習、觀之、柏伍、樹風、吾律、徐水、與流、兎月、如竹、芝仙、文志、如柳、素麓、春雅、未白、糸琴、文里、斜虹、龜州、至有、露朝、化春、素鏡（女）、如松、東鳥、梅露、寄涼、賀綠、兎涼、二夕、寄石、波靜、如線、一翁、里遊、柳家（女）、素皎、一壺、麥里、鶴里、舍鳥、禹舟、柳糸、白里、芳路、志朝、只明、齋路、此花、志漸、魚十、可定、如岫、耳行、芳習、芳度、泉有。

### 後記

本書編纂に就ては、数年前より資料蒐集に可成の努力を拂つて来たが、自家を遠く離れ難い事情にある余は、氣付のある所へも出向き得ず、其儘となつた憾みもあつた。然し資料を翹望する熱意は強く持つて居たので、活刷に取りかゝつてからでも、四度新資料を入手し得て、幸ひにそれを書中に添出することが出来た。これ全く人の感応、天の靈氣に育まれたに因るに、深く感激して居る次第である。是等の資料が早く入手して居れば、最初の概説など、少しく書き方を加減する筈であるが、終に及ばなかつた。読者は先づ是丈けでも纏め得たことに同情せられ、深く不備を咎められないやうに願ひします。

著者 誌





正誤表

頁	段	行	正	誤
二	下	一九	俳諧師	俳諧史
五	下	一四	着て居る	書て居る
七	下	六	七字を除く	始め耕月庵後は
一〇	上	一	日夜通ひ	日通ひ
一一	上	一三	蘇竹姓名を	蘇姓名を
一九	下	七	ないかと	ないと
二五	下	九	柳交亭	柳光亭
二九	下	四	能美	乃美
三一	下	九	勢延	〇延
三一	下	一六	元徳	元伝
三二	下	一六	元徳	元伝
三二	上	九	敬親	敬子
三二	上	一六	著らしい	着るしい
三三	下	一〇	不セイ(睡眠樓)	(不セイ)睡眠樓
三四	下	二二	成牛	成中
三五	下	七	天満宮	天満堂
三五	下	一九	二〇 両山館	西山館
三六	上	一七	多越天満宮	多起天満宮
三九	上	三	亨徳寺	亨徹寺
三九	下	一	吹て	吹い
四二	下	二二	奚化坊	奚花坊
五一	上	三	取つて	文取つて
六三	上	一三	古哉	〇哉
六三	下	一三	諏訪	諏防

正誤追加

頁	段	行	正	誤
四二	上	五	文祿の役	元祿の役
六九	上	一六	如シツ	如ヒツ
六九	上	五	天明の初	天明六年
六九	上	九	安永の初	安永六年
七一	下	五	天明初年	天明六年
七三	上	一六	富客	留客
七三	下	一六	二字を除く	東島

俳人名簿追加

天明六年の頃に、紫石房。

原田只月指導の萩秋声会員、空外(野村)。風来。春耕。才郎(平島哲郎)。無風(伊藤)。橙里(安藤正興)。閑居(有木)。

御山(高村)。梁六(伊藤)。

福川村、伊藤美吟(明治廿三年四月歿享年六十九)。

紫福村、白神晴光(明治四十年頃歿)。以下五名は晴光の指導を受けたる人、梅村(小島泰一)。大庭駒一(號不詳)。

小南(末田今治)。一曲(西村榮太郎)。露伴(杉山孫市)。

生雲村 仙溪(末田小雨の弟)。

奈古村、一松(小野松一)。富浦(三好仁五郎)。西圭(齋藤惠迪)。

大井村、阿武四郎 奈古村大井村の四名は昭和十五上梓せる小野義種米壽記念帖に見ゆ。

廣告

- 一、萩の陶磁器 山本勉彌著 萩文化叢書第一卷 A五版假綴 八七頁 定価一五〇円 送料八円 発売所 萩市東田町白鷺書店
- 一、萩電争議實録 山本勉彌著 A五版假綴 七二頁 定価一〇〇円 送料八円 発売所 全前
- 一、珍魚の譽 田中市郎著 山本勉彌編 萩文化叢書第二卷 A五版假綴 六二頁 定価一〇〇円 送料八円 発売所 全前
- 一、萩の五瓦 山本勉彌著 萩文化叢書第三卷 A五版假綴 七七頁 定価一五〇円 送料八円 発売所 全前
- 一、萩附近の史實 山本勉彌著 萩文化叢書第四卷 A五版假綴 一〇三頁 定価一五〇円 送料一六円 発売所 全前
- 一、防長に於ける郡司一族の業績 山本勉彌著 山本勉彌河野通毅共著 昭和十年発行 A五版假綴一〇二頁 改定価一〇〇円 送料一六円 発売所 全前
- 一、萩碑文鐘銘集 山本勉彌著 萩文化叢書第五卷 A五版假綴 一二七頁 定価二〇〇円 送料一六円 発売所 全前
- 一、毛利藩鑄貨と防長の古札 山本勉彌著 昭和廿九年五月頃刊行

昭和二十八年十月五日 初版印刷 昭和二十八年十月十五日 初版發行

定価一五〇円 送料八円

山口縣萩市江向四二二番地 著者 山本勉彌

山口縣萩市江向四三三番地 發行所 萩文化協會

山口縣萩市御許町一一三番地 印刷所 株式會社 萩響海館

山口縣萩市東田町五八番地 發賣所 白石書店

白石書店 電話八四番 振替大阪三七九三番

